

シリーズ[§]『青松』を読む[§]④

手づくりで悼む¹⁾

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて——

阿 部 安 成

series[§]『青松』を読む[§]①手づくりで始まる、wps243、2015.12

series[§]『青松』を読む[§]②手づくりで詠む、wps244、2016.01

series[§]『青松』を読む[§]③手づくりで偲ぶ、wps250、2016.04

2015/4/5 瀬戸内海に霧

第 5 号 手書き手づくり『青松』の前号第 4 号（1945 年 2 月発行）は、亡くなった出征職員の「英霊追悼号」としてつくられた。それは「あとがき」には明記されていたが、たとえば表表紙^{おもて}といった、読者のすぐ目につくところには記されていなかった。それが、第 5 号の表紙には、「故北山謙三氏追悼号」の文字がペンで右から左への横書きで掲げられている。表表紙は、すべておなじペンによる表記で、縦に「青松」、そのうえに横に「第五号」とあるのみ。追悼号ゆえの簡素さをおもわせている。前号と異なって、表表紙に発行年月の記載はない。またこれまでと違い、縦辺が長い判型となっている。

ここであらかじめのべておくと、3 月 8 日の自治機関創立記念日についての記事が本号にはある。その稿の執筆時が、この日のまえなのかあとなのかがわからない。月刊がまもられたのならば、第 5 号は 1945 年 3 月上旬か中旬の発行となろうし、追悼号ゆえにはやく出

1) 本稿は 2016 年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 C「20 世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」（JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也）の成果の 1 つである。

したということならば2月下旬にできあがったのかもしれない。

すでにべつにみたとおりに、本誌第4号の裏表紙には「六号は上本隆重氏追悼号として編輯は綾井譲氏」との予告があった。その時点では想定していなかった追悼号を急に第5号でも編集することとなったのだろう。第5号の表表紙は、そうした急がれたようすもあらわしているようにみえる。

戦時下とはいえ、手書き手づくりの『青松』が、知己の追悼の場として活用されてゆく。

榊目が謄写版で刷られた原稿用紙への記述となった「目次」は――

「花は散る」／「故人の遺詠」／総代石本俊市「弔辞」／土谷勉「死について」／穂波生「憶北山謙三君」／歌会同人「短歌 北山君を憶ふ」／句会同人「俳句 北山君を憶ふ」／松田美津夫「詩 思ひ出」／斉木操「詩 かたゐわれら」／歌会同人「短歌」／斉木操「非願父」／「潮音」／「児童作品」／「後記」

つぎには、おなじ原稿用紙に「巻頭之言葉にかえて、力の泉より」――

花は散る／花は散る、時は過ぎ行く、人は去る。／彼の遺骸を飾る花束は／生前彼が奮闘に疲れたる日の食卓に／只一枝ずつでもほしかつた。／花は散る、時は過ぎ行く、人は去る。／彼の葬場に聞く同情讃嘆の千言万語は／生前彼が世の無情と戦う苦悶の日に／只一言ずつでもほしかつた。／愛の花は咲くこと遅きに過ぎたり

――韻をふんだ詩は、病友の死にさいして、その生をおもい、みずからのおこないを悔いている。署名はない。

遺 詠 「故北山君之遺稿」は笠居誠一のペン。さきの「花は散る」の筆跡に似ている。原稿用紙はまえにおなじ。笠居は故人の歌をあげてゆく――

ひんがしに向ひて祈る朝風のこの一と時の海のしづけさ／秋晴の海のはろけさまなかひの極まるところ淡路島見ゆ／土の上に腹返したる秋の蟬拾へばちちと鳴きいでにけり
藻の花より

てて 父ぽつぽ母ぽつぽと鳴く山鳩の日もすがらしてものこほしき／葛餅も買ひて来にけり
みまつり 霊祭の今日の献饌は妻にもゆらねず／ほの白き八つ手の花の香に立ちて朝は思ひの澄み

透りくる 白砂集より

早きありややおそきありてとりとりの楓若葉の色匂ふなり／よき雨にはりまさりたるち
さの葉の青若々し今朝もかぎつゝ／縁先の南天の青葉見つゝしも朝は視力のおとろへて
あり／花かへで芽かへでこれに生立ちて花よりもなほ眼にさやかなる

——『藻の花』は、大島療養所所長の野島泰治編、大島療養所患者慰安会発行で、藻汐草第1叢書として1935年に刊行された歌集、『白砂集』はその第2歌集として同編、大島療養所患者慰藉会発行で、1940年刊行の歌集。

弔辞 「総代 石本俊市」による1945年2月17日付の「弔辞」は3枚にわたった。故人は1945年2月16日7時の逝去。その死は『青松』前号ができあがった直後だったかもしれない。石本は故人について説き聞かせる——（原文の漢字カタカナ表記を漢字ひらかなとした）、

君は資重厚惇実の性を備へ、清廉謹直にして寡黙勤勉の仁なり／君は大正十年十月二十七日入園せられ、日浅くして早くも娯楽会会長、或は学園の教師を勤め、昭和四年八月総代に推戴せられ、爾来衆望を担ひて総代の大任に就くこと四回、副総代を勤めること三回、人事部或は作業部等の主任を歴任すること三回、顧問に推挙せらるること三回、評議員に選出せらるること七回にして今日に至る、その勤務年数は実に前後十四年七ヶ月の長きに及び、その他各種特別委員或は農事委員等の要職に就任せり、／斯の如く君は常に重任を負ひて、吾が協和会の枢機に参画し、不撓不屈の特性を随時随所に發揮して、粉骨碎身よく本会の育成発展に尽瘁せらる

——故人北山は1921年10月27日に大島に来て、そののち「日浅くして早くも娯楽会会長」の役に就いたという。ここにいう娯楽会とは、「大島の療養所における自治の原初となる連携」を療養者のあいだにつくった組織で²⁾、いまのところもっとも古いその関係文書は、その表表紙に「大正三年十一月以降／娯楽会役員名簿／第一号／娯楽会」と記された綴とな

²⁾ 阿部安成、石居人也「香川県大島の療養所に展開した自治の痕跡—療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」(『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第10巻第1号、2013年)を参照。

る。「協和会」とは、1941年にあらためられた自治機関の名称である。北山は療養所自治をその初期から担ってきたひとりとなる。そうした「生前の功勞に対し、准協和会葬の礼を具へ」たとの弔辞を、おそらく石本は葬儀の場でのべたのだろう。

石本はまた、故人の「近詠」を披露している——「一億の末の末なる我もまた片居の日を神風とせむ」。これを石本は、「吾等への遺訓」とうけとめている。

石本の「弔辞」は、「10×20」の印字がある四百字詰原稿用紙の裏に記されていた。12、13、14のノンブルがうたれた原稿用紙には、芝居の科白が記されているようだ³⁾。それと「弔辞」では筆跡が異なる。

死 土谷勉の稿は「「死」について」との題がつき、5枚の原稿用紙裏に記されている。土谷はまず、大島の近況を記した——「すでに今期（昨年の四月一日から）今まで（二月二十二日）までに計八十四名死亡した。近年にないあわたゞしいことである。〔中略〕現在、全病友五百八十人。死亡八十四名とすれば一割三分強である。四月まで待つたら一割五分にもなろう。百人に十五人宛一ヶ年に死亡する訳で、誰かまた感懐なきを得ようぞ」との驚きと嘆きを露わにした。

ついで死生観を展開するなかで、「吾々癩者が苦惱の末、油の切れた灯心のやうに消えてゆく様はあはれともはかないとも實際言ひ尽せないみじめである。息が無くなると早速湯棺を済ませ、明くれば葬式であり、も一つ明けると骨拾ひである」と、呆気なさ、虚しさを記すのも、「余りに死に対ふのが頻繁な故、ともすると吾々の考へがそれに馴らされて敬虔さを失ひ、機械的に事を運び勝になつて、その際最もきびしく観なければならぬ筈の大切な事柄が見過されさうに思はれる節々があるからである」と説く。

そして土谷は歴史を語る——

由来、歴史は——それが協和会の歴史であらうと、救癩の歴史であらうと同じであるが、

³⁾ 大島の療養所における芝居については、阿部安成「自治のアトラクション—大島の自治は踊る大煙幕」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.175、2012年10月）を参照。石本は大島での芝居興行を担った重要なひとりだった（阿部安成『島で一ハンセン病療養所の百年』サンライズ出版、第VI章、を参照）。

人を除外しては考へられぬ。歴史とは過去の生命の積であり、未来も亦さうであらう。歴史が人を操るのでなく、人が歴史を創るのだと識る時、始めて吾らは生ける験を油然と覚える。人が歴史を創ると考へることは、人の評価にあたり特に根本的である。故人を送る場合、送る心はいつもしめやかなものであらうが、故人の過去に果した役割について十分な認識のある場合と、さうでない場合とでは、よし葬送の式の末席に列すと雖も、心自ら大いなる相違のあるは、吾々の常に経験する処である。

——歴史観から故人の送り方へと議論を転ずる。

歴史が過去の生命の積であると観ることは、「現在がさうである」といふ言ひ代へに他ならない。故人が過去に果した行跡が、今の自分の在り様との関係に於て充分内省された時、人一人を送るといふことは尊厳極まりない敬虔な事実であつて、仇やおろそかには出来ない人世の重大事なのである。過去なくて現在はない。事の大小にかゝらず現在の自分の在り様が、すべて過去に規制された結果であるから——。これが又、今の自分を正しく識る大切なよすがであつて、私が憂れるのは、余りに多い身の死に馴れ過ぎて、この一番大切な静思と内省が閑却され勝ではなからうかと言ふことである。哀悼も追悼もこの内省が根本である。

との一見したところ、追悼の場にはふさわしくないほどに延々と議論がくりひろげられる。

悼み 悼の語は、悼む、と動詞として用いることが通例で、これを名詞とする用法はないのかもしれない。だがこの土谷の滔々としたと喩えたくなる文章は、故人を喪つたことの悼みがあらわれているのだと読ませるところがある——「霊交会では葬儀の式上、長老の長田さんがいつも故人の追憶談をのべられる」というこの霊交会とは、大島の療養所が開設されてからそう年月を経ないうちにつくられた、キリスト教の信徒団体である。その創設信徒のひとりがここに記された長田穂波だった。長田や、このときすでに亡くなっていた三宅官之治たち「長老」や、彼らよりも一世代若い石本とも懇意にしていた土谷は、じつは、キリスト教信徒ではなかった。

その土谷は、長田による追悼談は「最も深い意味のあることで、はたして幾人真にこれ

を理解するだらう。弔辞にしても故人に捧げるものではあるが、主観的には同じ意味である。／実際、如何にそれが頻繁であらうと、死といふものは人世一番おごそかな事実である」と言明したところでようやく故人の名がとなえられる。

私は今回北山さんの易簀されるのを身近に見た。何とも淋しかった。哀悼の情を禁じ得なかつた。幸ひ、故人の過去の偉大なる功績に鑑み、准協和会葬の栄を賜り、総代さんの弔辞は元より、お忙しい園長先生からまで御鄭重な弔辞を戴いた。故人の霊もさぞ万足であらうと思ふが、お互ひはもつともつと今の自分の身の在り様を、故人とのつながりに於て内省する要があるように思ふ。これこそ現在に感謝する心の心棒ともなるのであるから——。／昭和二十年二月二十四日

——土谷はつくづくさびしかったのだとおもう。

6から9までノンブルがうたれた（1枚にはノンブルなし）原稿用紙が土谷稿の裏面であり、それはまたさきの石本の稿が記された原稿用紙とおなじ芝居の科白をおもわせる文字で柵目が埋まっていた。

人格 穂波生「噫北山謙三君」は、筆者と故人とがひとまず同郷（故人は北海道生まれで「撫養」が徳島）と知った初対面のようなすを示し、「君が十八才にして普通の青年と異なつた点は、人格的な奥床したであつた」と偲んだ。そのゆえんを筆者は、「君の＝天理教徒たる信念と謙遜さ＝これにあつたのである。／こゝに又、君が協和会准会葬として惜まるゝ一代の偉大さがあつたのである！」と説いた。こうした故人の生をおしひろげて、人の一代は＝その人の精神の処置によりて定る＝と言つてよい。特に宗教の上に確く立つて、ゆるがざる信仰と、その信仰の実行とこそは『活ける人格となり日々の生活となりて光り輝くのである』、そこに癩者とし入園者としても立派な人生の足跡をとゞむる事が出来得るのである。

と病んで療養所に生きるものの、あるべき姿勢をとなえたのだった。

さらに筆者は、療養所にあるべき個人について論じる。

個人として光輝ある生存そのものは＝即時に又利他となり、且つ社会の益となる＝

のである。

という筆者は、ほとんどつねに、療養所にいるものがどのようにして「社会の益となる」ことができるのかを問うてきたといってよい。そのためには、療養者が個人として「光輝ある存在」とならなければならない。ただし「エゴイストは社会の害悪となるので『俺は勝手だ』とはゆるされない事である。／特に園生活の如き＝大家族主義社会組織制度＝に於ては俺の勝手はゆるされないのである。此処に『相互扶助』の協和会と其の規約とが、全園生活の幸福の保護として厳立してゐるのである……」と論が展開する。療養所生活の鍵が「相互扶助」の理念と実践だということである。これをめぐって、

規約改正の時＝作業問題に関して現行法には東條政芳君と北山謙三君との賢明にして真剣なる人格的光輝が織り込まれてゐる＝そこに園作業に従事することに於て、個人としての生き甲斐と同時に我らの社会幸福とを必ずもたらず事と信じて疑はないものである／人格者として信じ得らるゝ人の為す事は又安心して信じ受け入れらるゝものである！

と、「相互扶助」の優れた実例として、故人がかかわった「園作業」をめぐる「規約改正」が想起され、そこにこそ故人の「賢明にして真剣なる人格的光輝」が籠められていたと顧みられたのだった。

療養所ではどういう生が評価されるか——「やり手とか智慧者とか教育がある＝斯ることのみでは我等の内では重要視されない。又軽症者であるからとて用ひらるゝものではない……真実無私……公平にして謙遜、これが一番である。腕よりも人物本位である、即ち協和会役員は『人格的信用』によりて選ばれてゐるのである」とのこと。故人の追悼をとおして、療養者として、また自治を牽引するものとして重要な領分に、穂波生は「人格」を重視したのだった。

真の家長 では、この「人格的信用」に篤い療養者は、療養所においてはなにものとなるのか——「世の政治家とは趣きが異なりて＝真の家長である＝人物が真剣なだけ『心労』は一方でない。これだけは園長殿も、職員各位も、病友達も未だ十分理解されてゐら

れない。将に精神労働に対しての待遇が欠けてゐると思ふ」との問題が指摘される。

実証として貢献者の健康低下の急速である……協和会として更に斯点を考慮すべきであると思ふ。でないとな真面目な人物は皆真底より『逃たがる』のである……。

との現状が省みられる。さらに、

責任を問ふに厳、仕事を多く期待は重くして協力と待遇は軽い＝これは協和会の病ひであると言へると思ふ。給料を見よ、功労金を見よ、特配品を見よ＝自分は十余年に渡り女房役をつとめて経験の上より主張して来た処にして、北山君に対しても相済なく思つて居る処である。元より准会葬も良いが生前に於て＝迫めて任務中に於て＝最少し報ゆる処ありて欲しいと思ふ者である。

と、療養所における「長」を論じるなかで、故人の生前の待遇をめぐる不備が惜しまれたのだった。

善い面をして種々と＝いとほしい陰謀をやる者＝を最悪として、ムヤミに不平を言ふ者、自利のみ計るもの、利用せんと為るもの等々ありとすれば如何ぞ……物質的問題よりも心労が甚しい……精神的慰勞の望めないとすれば物質的にでえも報ゆべきと思ふ。
／地位も名誉も何らの数ならぬ大島、人は変り貢積は忘れられる処、病勢を重くすると部屋の隅にて寧ろヤツカイ者視さるゝを思へ！！／神仏でない人間だ、誰が辞退せざらんや！！

と、穂波生の憤懣が募る。このとき穂波生は、協和会の「顧問」だった。だが「自分は敢て顧問たるが故に是を言ふに非ず／真に協和会の前途を思ひ且つ青松園上下の幸福を希ふが故に述べて余論を求めんと欲するものである」とつけくわえる。自治を担うものが充分にいないところでの苦衷の表明である。

故人を悼むとき、また彼の功績を「詰所訓」として活かそうとするとき、「北山君の人格は大いに輝いてゐると思ふのである」と、穂波生は故人を送ったのだった。穂波生の弔文は、「昭和二十年二月大雪の朝」に記された。末尾には、「小春日や会葬の群黙々と／足やみて冬窓深く君偲ぶ」の2句が添えられた。

なお、「詰所」とは、自治機関の執行部というところか。固有の部屋があったかどうかは不明。

その裏 穂波生の稿は、「KYOKUTO 10×20」の文字と罫目が印刷された四百字詰原稿用紙の裏に記されていた。①から⑦までのノンブルあり。その裏、罫目のある面に記された手書きのノンブルは、(後ろから)、51、52、61、62、38、57、59 と順不同となっている。両面とも、はっきりと穂波のペンとわかる筆跡である。

ノンブル 59 の原稿用紙冒頭には、「十二、『死』！」の見出しがある。いずれも信仰にかかわる内容の原稿である。

もうひとつの追悼歌 さきにみた「目次」では、穂波生の原稿のつぎには、歌会同人と句会同人による故人の追悼詠が載ることとなっている。ページをめくったそこには、岩田ノブによる、「故志真郁夫氏ニ捧グ」の表題のもと 1 首が記されている——「神風と吹かむ真心詠み遣しはや杳かなり君がみ魂は」。

なお、この岩田の稿の裏は罫目が印刷された原稿用紙で (ページノンブル 22 あり)、そこに記された短歌などのペンは、前第 4 号の笠居誠一の稿の裏面とおなじ筆跡である。ページ全体にいくつもの抹消の意味であろう斜線が記されている。そこにある短歌も記しておこう——「豆紫の垣を刈込む木鉄の音澄む五月の空遥かなる／命つひに極まる面に新しきガーゼせきせつゝ想せつなさ／自らを高きに置きて物を言ふ人に向へりした憎みつゝ／初夏の陽光に燃えて咲く花の松葉牡丹は情熱の花／自らの行為を愧づる日の夕べ身ごもる猫が窓の下行く」——いずれも習作か。

^{おもて}表面にもどろう。これは特集号の主題である追悼の対象者が、北山以外にもうひとりいるということか。

そのつぎが、「十行 廿字詰」「コクヨの 165 規格 A4」の文字と罫目が印刷された四百字詰原稿用紙に記された、小見山和夫による「短歌」／志真郁夫氏をいたむ」の題のもと 5 首——

一億の末の末まですめらみのみ楯たらむと詠みし君はも／畑作り歌詠む日日を秘かなる

さきはひとして過ぎし一世か／み戦に勝抜く日まで在りたしと希ひし心つぎて歌はむ／
 この島の古き歌びとと在り経つつ導き呉れし心をつかむ／つくづくと梅の蕾になごむ陽
 の春めくみれば心はべむを

——ここにいう「一億の末の末」とは、さきの石本の「弔辞」にあった故人近詠の始めの
 ところとおなじだ。

つぎの浅野繁「虚日」の稿は、「十行二十字詰」の文字と罫目が印刷された原稿用紙の裏
 に記されている。その冒頭、

昭和二十年元旦之計／一億の末の末なる我もまた片居の日々を／神風とせむ 志真郁夫
 とさきにふれた故人近詠の1首が載せられている。この志真郁夫とは北山謙三の筆名なの
 だろう。歌会同人と句会同人は、その集まりにふさわしく、故人をその筆名において送ろ
 うとしているのだった。浅野の稿をみよう。

ひそかに、極りてゆく命凝らしほとぼしりたる念ひなりしか／白梅はふふみそめにけり
 しじ思へてまきびしき世に死なせつるかも／ふるさとや遠み痾むゆえひとしほにとほし
 かりけむそのみちのくは／眼に逐うて嘆きしまさるしろしろに^{けぶり}烟^{けぶり}なずさふ凍土のうへ／
 松ぼくりほつり音してひそけさよ風も鎮みし霜夜の土は

そのつぎが、田根正夫「志真氏を偲びて」——「朝々と詠へませ君、あの歌もこの歌も
 よし俳はあり／天の国即ち神に召されたる、君の御柩冬の陽の澄む／肅として冬の真陽す
 む式場は捧ぐ弔辞の声透るなり」。

ついで、笠居誠一「故志真郁夫君を憶ふ」が短歌4首——「憂国の至誠を詠みて遂にか
 も帰らぬ人の数に入りけり／君病むと聞きつゝ遂に訪はざりし身の怠りを悔ひて祈れり／
 親しきはつぎつぎに逝く寂しさに君の名をまた一つそえけり／亡き友に君の御名を数え
 つゝ侘しき老の朝夕慎む」。

この笠居の稿は、やはり彼の習作歌なのか、それを記した原稿用紙の裏面に記されてい
 た。原稿用紙のノンブルは17。さきの岩田の稿の裏面がノンブル22、前第4号にあった原
 稿用紙のノンブルが18から20と、ノンブルが連続した原稿用紙の裏面が用いられている。

全体に大きく×の抹消線が引かれたページに記された短歌は5首——「広前に追難を祈る己が影の細々と月の光り凍てけり／いきあがる井戸水汲みて顔洗ふ朝は大気の冷えが身に沁む／盛り上りふくれあがり来て波の穂の碎け広がる月の渚に／ひとむきに潮流るる藻の中に背をひるがへし光るうろくず／凍道を下駄鳴らし行く足音に想ひ寄りつゝ本をふせにけり」。4首めのうえ欄外に「再」の文字。

斉木操は稿を「故北山悠雪氏を悼む」と題した。「悠雪」も北山の号か——「一億のすゑのすゑなる雄心をつゆうしなはず君や逝きにし／皇国の必勝を信じかたひながら雄心に燃え君はありにき／× × ×／敵機々雲まさしく見たり屋島嶺ゆわが頭上にと長く曳きたぬのびたる／天上は寂光の域と兵いへりそこにあだなす敵機うたばや／（従軍作家トシテ初ノ戦死者ナル里村欣三ノ“天上の景”ナル朗読放送ヲ聞キツゝ。）」。

綾井譲「故人を偲ぶ」は4首——「朗々と君が詠ひし歌声もこれより後は聞く術のなし／管制の灯の下に居て遺したる日記を読めば佛に来る／雨の日は心みづから落着くと茶を淹れし事語ひしこと／君が訃を聞きし輩の如何にせむ来て給ふべき路は遠しも」。

もうひとつの追悼句 喜田正秋「俳句」——「水温む故郷に遺骨いまぞ着く／冬空のかたむく果ての淡路島／病窓を覗ける雪は五剣山／勝つ迄は生きむ願ひやさる〔養麻梓〕をがせ／退避壕出づればありぬ寒の月／冬波の底より翹てる千鳥かな」。

香山爽子「俳句」には、「故北山兄を悼みて五句」の文言がつく——「きみが訃に驚きし朝凍きびし／春浅し思ひまうけぬひとの死し／惜しまれて逝かるゝひとやもの芽ぐむ／下萌やきみ逝きてより早二句／行雁やきみ亡き後のさみしさに／舟の妻舵かいこんでふところ手／繕ひてあやうく立てる雛かな／風花や頬被りして舟の妻／仰ぎみて塔が傾き春の空／白砂に潮の香のあり暖き」。

大原枝風は、まず「故北山悠雪氏追悼句以下二句」と記して、「この柩の別れは梅の上下道／梅の香とともにおしまれ逝ける人／御戦の果見ん命二日灸／梅心忘れて仕事追はる日々へ／風上の野火守る人を呼びにけり／野火守の耳に手をあて聴き返す」。

詩 松田美津夫の稿には、「詩“故北山謙三氏追想の文”／“思ひ出（三篇）”」の題がつ

く——

床の中から／病勢をきずかふ私を見つめた／おとろえの目立つ瞳の光りが／ほど遠い
 春のおとずれをあこがれ／弱い者には 此の寒さが／でも 峠^{タウダ}は越えし／そのうち
 我等の世界がくる！……／つぶやく様 語る面かげが＝／ふりかへるまいとつとめる
 記憶の海に／なつかしく うかぶ数々の思ひ出！

——ここに記された、故人の言として記録されたとみえる、「そのうち 我等の世界がくる」とはなにをあらわしていようか？、この言をわたしたちはどううけとめればよいのか？。

松田の稿は、「大島療養所」の名が中央に印刷された四百字詰原稿用紙の4枚の枡をうめて、「四月四日」で記されていた。

斉木操「(自由詩) /かた^みわれら」——

今日も／そして昨日も／神のあら驚 還らぬ翼を大空につらね／ほゝゑみて／征き、征く。／——かたひ虚しと誰かいふ／この日たゝずして／何時の日癩者たつべしや——

とは、ここでも「神のあら驚」と喩えられる神風特攻という戦闘に照らして、療養所で「たつ」ことのできないわれ(われ)が「かたひ虚し」ととらえられている。

かたひわれら／今こそ憤怒の偉き魚雷とこぞり／仇討つ祈り、朝夕に昂く／白のみ旗うちふりかざし／神々を税ひまつらむ。

と、その「かたひわれら」を反転させて起つべく、その決意がみせられている。

その裏 綴じられているため、この本誌を回覧するときにはみることができなかった斉木の稿の裏面は青い色の罫線が縦に入った紙で、それは「一時帰郷嘆願書」だった。文面はすべて手書きで押印もあるところからすると正本なのだろう⁴⁾。これは反故となったのだろうか。文書の日付は1945年2月25日。たとえば本誌に載った石本の弔辞は1945年2月17日付だったのだから、これは保存年限が切れた非現用文書ではないのだろうか。この嘆願書が、なぜこうした文書が、手書き手づくり『青松』の用紙として活用されたかは不明

⁴⁾ 手書き手づくり『青松』のリプリント版制作にあたって、この文書は掲載しないこととした。

である。嘆願の内容をみよう（漢字カタカナの原文を漢字ひらかな表記として転載した）。

親一人子一人の家庭の中に病を得候が、家なる父は今年六十五才の老年に候ひて、何時
他界致すやも計り難く、さは候共、私の退園も今は最早覚束無くと存じ候はゞ、此の際、
私に代る後見人の選定及び家事整理等一刻の猶予も之無くと心急かれ候間、父とも合議
の上、茲に一時帰省嘆願に及候間、之の段枉て御許可相成可伏して請願奉候也

とは、古びた候文の体である。

宛所は「大島青松園長 野島泰治殿」、そのあとに、生年月日（1915年2月27日）、入園
月日（1943年3月9日）、過去一時帰郷の有無（なし）、帰郷先（愛媛県）が記されている。
彼は帰省が叶ったのだろうか。

日記 つぎからの数ページは、古い反故となった紙がいくつか貼られたそのうえに文字
が書かれたり切りとられた日記が貼られたりしている。

まず、「自己に真剣であり常に忠実な批判力を持つて居られた事はこの日記の一部を見て
も知ることが出来る」の文章がある。これはさきに「故人を偲ぶ」の稿を寄せた綾井譲の
筆跡に似ている。

そのとなりに、6月5日（木）がうえ、6月6日（金）がしたとなる日記帖の1ページが、
そのうらには6月7日（土）がうえ、6月8日（日）がしたとなる日記帖の1ページが、
そのつぎのページは週のかわり目のための余白なのか、上下に区分されていない1ページ
に「宿直」の表題がついた文章があり、そのつぎはノートを日記として使っていたその一
部となる1月26日（金）から1月27日（土）までが3ページにわたってある。

これは、月日と曜日からして、1940年1月26日（金）と翌27日（土）、1941年6月5
日（木）から同月8日（日）までの日記となろうか。故人のようすを伝えるために、これ
ら数日分の日記がここに綴じられたようだ。

6月5日——「晴后曇夜雨／分科会第四日／昨日に引つゞき作業互助査定基本人員調査を
なす。当分科会副主査篠原君自室の掃除消毒のため午前中休む。／六月職員患者合同短歌
研究会、場所礼拝堂、時刻后六時半、津川君司会当番／病友側笠居、小見山、浅野、志真、

田根、斉藤、赤沢、竹原、静森、津川／職員側川染、池田、北田、中原、山田】。

ここにみえる「志真」は、日記の執筆者本人となる。

6月6日——「あめ／第二部会／第五日目／唯今自分の奉仕させて貰つてゐる調査事務の如き本来自分の性に合はないこと遠いものがある様だ。この自分の不才を補ふものは、祈りつつ努力する奉仕と誠実の外、余念あるべきではないと信ずる。／而して自分の力と他の力とを完全と言ふまでに一致協力せしむるにある」。

6月7日——「はれ／部会を開く／第六日目／調査会に關係してより仕事が規則的になつた為、却つて治療を受ける機会が多くなつた。／委員長の大場先生を案内して、午前九時半には治療に行くことにきめてゐる。主に大楓子油注射と洗眼を受ける点に於て先生と僕とは共通であるから…。静脈が浮かんでカルシウム」。このあとは綴じ部分でみえない。

6月8日——「はれ／日曜につき部会も専任委員会も休み。／たまの休日とて、きくえは畑の仕事を目ろんで当にしてゐる。／西瓜畑の敷物などしてやる。午後、病室を訪問する予定をしてみたところ、昼食がおそくなつた為果さず。八栗宣教所も教規の改正と共に分教会に改称さる。／天理時報お送」。同前。

「宿直」の題がついた文章は、「雨漏」について。ただ、「八月の十四日の颱風の被害で損障した個所が少くない」というので、これはさきの日記とはべつなところからの貼付か。

1月26日の天気は「晴西風強」、この日は「喜びの日であつた。それは財団法人中央社会事業協会総務部長原泰一先生の御来島」があつた。これを「吾々に取つて、少くとも今後の癩根絶無癩国日本の招来のための最も大いなる光であり力である」と喜んだのだった。来島した森はまた、「癩予防協会の理事」でもあつた。細かなことながら、このとき森の乗った「大島丸は東海岸に着」いたとのこと。栈橋のある西海岸ではなかつた。

1月27日の天気は「晴后曇」、「今日も大島はお客様を迎へるに忙しかつた。香川県各町村の社会事業関係者約六十名と、師範学校生ら」が来たとのこと。

これらは、1940年代初頭の療養所のようなすを伝える記録となる。なぜかこれら日記の貼付は「目次」には記載がない。

短歌 小見山和夫「畏みて」の稿からまた、歌会同人による短歌のページとなる。これは追悼とはべつの歌作か。

米機奴ら太宮御所に投弾する暴挙をあへてす恐れ多くも／神域に御苑にあへて投弾せし
米機ぞ撃ちて八つ裂きにせむ／大御心いかばかり憤り給ひけむ拜しまつるにも憎くぎ米
鬼ぞ／ひた堪へて病みゐる我も今の今米鬼を撃たむ銃を執りたき／大御心に誓ひまつら
む一億が敵撃滅の祈りを我も

——故人の近詠という「一億の末の末なる我もまた片居の日日を神風とせむ」に惹かれて、つられて、つらなって、意を汲んで、ということなのか、剥きだしの敵意と憎悪が詠まれている。「八つ裂き」の語が激しく、また、「病みゐる我も今の今米鬼を撃たむ銃を執りたき」と願う。(くだんの「コクヨの165」原稿用紙)。

小見山はまた「詠草」の題で9首を詠む——

短日や友がたどたと読む記事の耳に馴れつゝ吾は盲^あひにけり／凍みる夜の耳に頭はる
爆音はまさに敵機かも一機なるなり／国体の尊厳に触れてはばからぬ米英を撃ちて八つ
裂きにせむ／ちり一つ私ごとを嘆かむや玉垣に凍む雪の明るさ／玻璃戸透く雪の陽ざし
にうづくまり春恋ふ我やかかくて盲ひつつ

——「盲」であることと、日々の感性と、そして敵への激昂が入り混じるようにみえる。

さらに「硫黄島勇士に贈る歌」の題での5首がある——

神の如き奮闘を日夜伝へつつ巖よりも固し硫黄島の守備／尺寸を争ふ戦日夜なくすめら
み国の島の防人／浪と寄す敵幾万を撃ちくさき硫黄島を守備す皇防人／神と^{征く}ある伴の隼
雄の硫黄島二十重に囲む敵もものかは／日光隊胸の標の桜とも散りたまひしか敵中ふか
く

一木一草も武装終れりと硫黄島守備の歌詞を送り給ひつ／千早城の古事にたとへて守り
抜く硫黄島を思ふ防人の心を／物量をたのみひた寄す敵中へにわが肉弾の前に崩つ／お
ごそかに日夜ありつつ硫黄島の防人に寄す熱き祈りを

と、硫黄島を思うとき、さき憤激がいくらか冷やされたとみえてしまうが。

浅野繁は「冬相」を詠う——

朝つかた雪を交ふる潮風にまともにむきて身動^{じろ}がずわれは／日表のまぶしき雪に影をひく梅のすばえのさみどりのいろ／病みて生くる心は雪に影をひく梅のすばえの直^{すく}なるに悔ゆ／北支ゆり還りたる姉ははばびろきこゑに嘆かふ秩序なき民を／わが病むを悔しと姉の云ひ継ぎて自^とが婚期にはつひにし触りず／身にぞ即^つく姉の世さがのきびしきを知りつつはゐて云ひは得なくに

煮えたぎる怒りをいかに軀は堪へめ雪しまく海に眼を凝らす／さりげなくこと成し遂げし益良雄に随はまくはすべなきわれか／いにしえゆ受け嗣^{まさき}ぎ来にし雄心をけだし目前^{まきま}に観せしめたまふ〔「十行二十字詰」の文字と柘目が印刷された四百字詰原稿用紙の表と裏〕
泉俊夫「短歌詠草」——

貧しくも心清らに生きゆけば日毎日毎の輝やく如し／白雪の富士を目指して襲ひ来る敵機ことごと爆ぜしめ給へ／情報に心耳澄みゆく静か夜やどよむ海波の音にふけつつ／雪解けの水の音ひびかふ部屋ぬちに想熱けく吾れの堪えぬし／しらしらと玻璃に沁^てみ映る雪のいろ心愉しく文机^{むか}に対^{むか}ふ／塵一つあらぬたたきの湿り香や食事配給所の午后の寂けさ〔「OS原稿用紙」「10×20」の文字と柘目が印刷された四百字詰原稿用紙の表〕

笠居誠一「短歌」——

国難を今日の現実に思ひ見る老の血潮は憤激に湧く／警報下の真夜の病舎に静坐して皇御神の御稜威を祈る／神洲護持の至誠は裡に燃えにつゝ病む術なきよ祈り慎む／敵機来襲の警報下の夜は肚据えて癩院に己が持場守らむ／鉄量におごる醜敵根こぎ撃つ日本刀の切味を見よ／通信のたへしマニラの紛戦に思ひ及びて夜半を眠れず／断種して日本人をたやすとふ非道の米鬼八つ裂にせむ／物量におごる米鬼ら眼あらば大和魂の底力見よ——「癩院」で発せられた、「米鬼」「醜敵」を「根こぎ撃つ」「八つ裂」にするという「憤激」。

短編 齊木操「(短篇)／悲願父」は、戦時下に父が子に「焼米」を送るという短編。その息子は、「漸く成人した末、不治の病に取憑れ十年前家郷を後に〇〇療養所に入つきり」

となり、「いま皇国の興亡を賭して起つべき年を、憐れ病の床に起き臥す息子からは、何時も身の不甲斐なさを嘆き、「不忠不孝の罪を詫びつゝ父母の倅と弟達の武運を命かけて祈つてゐます。私達には最早祈りの外、報国のすべもありません。朝晩、弟の仇を、憎い洋鬼を祈り殺すべくと、島の鎮守に心誓の祈願を捧げてゐます。」と口癖のやうに報じて来、病苦や空腹のことはついぞ云つてはなかつたのであつた」と設定されている。

そうした境遇に生きる「憐な子に寄する親の慈悲であり、涙」が、冒頭で示された「焼米」の送付で、これが「悲願父」という題目とつながるのである。

その「一握の焼米が彼の息子の手から、同憂の友達の手から手へ分配される時、その僅な志しが少しでも彼達を慰め励して呉れるやうと、親父は密かに心に祈り、自づからの慰めともするのであつた」と結ばれる短編である。

隔離施設に生きる療養者が、療養所の内外の、また、療養所内の病者のあいだの「手から手へ」というつながりを望む創作物に、ひとまずはみえる。

これは「昭和二〇年二月記」とのこと。なお、引用者が引いた下線部は、原文での挿入文字や下線といった追記をあらわしている。「父」には「親」の文字が挿入されている。これらはみな赤インクでの追記となっている。

潮音 今号は原稿用紙裏面4枚にわたる長編である。

◎二月二十二日の昼食に珍しい鯔を下さつた。鮮魚といへばほんとに久しぶりである。しかも一人宛四十三匁。役所の方から通知に接した詰所は大童で配給にとりかゝつた。すでに前はエンエンたる長蛇の列。渡す方も受ける方も大喜びだ。少し位、口をすべらしても誰も怒りさうにない。げんきなことである。当局の温情と御努力はさること乍ら、よくもこの節、入れて下さつたことだ。患者の吾々にまで食べさせようと思へばこと。よくよくの思ひやりがなければ出来ることでない。久しぶりの舌鼓を打ち乍ら何と有難いことであらう。誰が入れて下さつたのか知らないが、外の人にも心からお礼をのべたい。病友一同とても喜んだと、お伝へが願ひたいものである。／“ぼら汁をめでつゝふと吾が思ひ草はむ兵にかゝはりてをり”

——ここには食糧物資が不足するという戦時下に、療養者にむけて、療養所の外から、また療養所の職員から、与えられた糧への歓喜と感謝とが記録されている。

前第4号で浅野繁が詠んでいたアルミ貨幣の回収についても記されている。

◎飛行機を作るアルミ貨の回収が御承知の通り園内でも行はれてゐる。二月二十五日までで代替した総計／九百二十円也／大したものである。代りさへあればまだまだ出るだらう。今後とも御協力が願ひたい。吾らのアルミ貨で醜翼を叩き墜してやらう。

との意気込みがみせられる。

その「醜翼」——

◎二月二十五日またまた敵機頭上をかすめる。奴ら折からの悪天候をねらつたものか。機影を見ることは出来なかつたが、爆音すぎて待避信号の発令は何ともはや珍しかつた。／解除後、山本補導部員がわざわざ警邏に出張され、「異常なかつたか」／と、雪中にもかゝはらず御訪ねをいたゞいたことはいふまでもなくうれしかつた。ちよつとしたことが嬉しいものである。この親切こそ、時局下、最も大切だと痛感され、ほんとうにうれしく思つた。

——ここにいる山本補導部員は園職員か？。

この時点での療養所情報——

◎現在入園者総数五七五名／普通室 男 二四八名／女 八六名／特定宅が二四一名である。／それで三月上旬の作業希望申請者が／一八八名／男 一四五／女 四三／作業総数が現在二二一である。従つて余りが三三／健康率低下とはいへ一般の奮起が希ましい。／“遊んでゐてもお腹は減るものなり”

——男女比が歪に不均衡だ。その作業はというと、「◎作業状況がこんなと作業部の苦心は大である。どの一つも欠かせないものばかりである。作業するといふことが即ち銃後の護りであり、立派な御奉公であり、大東亜戦争を勝ち抜く至誠の実践であることを忘れてくれない」との戦時の姿勢にかかわっている。

食糧——

◎二月二十八日——。／代用食のうどんをいたゞいた。珍しいので大喜び——。／“代

用食の筈のウドンが美味すぎる” /殖産部の親心で野菜の配給も併行され、一日思はぬ御馳走になった。 /◎当局の並々ならぬ御尽力によつて馬鈴薯種が思ひがけなく沢山入り、百姓一同張切つて今植付最中である。すでに果樹園畑だけで作付千五〇〇坪、此方の百姓を加へたらおそらく三千坪近くなるだらう。坪一^{〔興〕}目としても三千^{〔興〕}、坪二^{〔興〕}とすれば六千^{〔興〕}。獲らぬ狸の皮算用ならぬ薯算用であるが、一塊でも多く出かして、御承知の外からの入荷などとても当にならぬ時世である、一般にウンと食べてもらひたいものである。自給体制確立も翼賛の一步である。

とのこと。

創立記念 さて、この「潮音」のページで、「吾が協和会創立十四周年記念」が記録されている。

◎三月八日は大詔奉戴日であり、吾が協和会創立十四周年記念日である。戦局いよいよ苛烈を極む秋、吾らの意義は一入深い。物を腹だけたべるばかりがたのしみであつてはならぬ。一日々々に御奉公の至誠を捧げることが、最大のたのしみとならねばならぬ。 /作業人に対しては 下駄の特売 / 代用食 ウドンの配給 / 白菜 三〇〇匁統制販売 / 鶏卵 一ヶ慰安配給 / 焼饅頭 二ヶ慰安配給 / お祝ひの印ではあつても、尊いそれらの品々を手にするによつて、吾々は明日の御奉公をこそ新に誓ひたいものである。今の時世に、どこにこんな有難ひ住ひがあらうぞ。他所並みならぬ他所以上有難くしていたゞくことは他所以上に御奉公を誓ひ、他所以上に皇国に報ひる処がなければならぬ、もらふことがあたり前では乞食根性である。乞食根性を撃滅することも戦ひである。「外の敵は破り易く内なる敵は破り難し」と識ることである。破り難きを識るは破る一步である。くろがねの人屋の飯の黒飯もわが大君のめぐみと思へ（子規）

——ここでは、この時点で協和会とよばれている自治機関の大島における意義をみせることをしない。創立を記念する。ただし、祝いの品を食むだけではだめだと注意をして、「至誠」をささげよとよびかける。「乞食根性」を撃滅せよ、「内なる敵」を撃破せよ、ととなえられる。「他所以上に皇国に報ひる処」へ進み出でよ、と、それは療養所のなかから最前

線への進撃の号令でもある。

その裏 「潮音」は、「大和製品」「10×20」の文字と罫目が印刷された四百字詰原稿用紙の裏に記されていた。手書きノンプルが21から24まである罫目面の原稿用紙中央部の余白には、特徴のある記号が記されている。この面の罫目を埋めるはこれれまた芝居の科白とみえる文章である。

子ども 右上欄外に「昭和 年 月 日」とある謄写版刷りの原稿用紙には、「目次」にいう「児童作品」が記されている。まず、「あこがれの海 初六山口忠夫」――

僕達はあら波に、「きたゑた国土を守り又は、大東亜海を守らなければなりません。言ばにも 海へ とはあるが山へ とはありません。そこを見ても海はどれだけ。ありがた
い事かわかるではありませんか。／その。あこがれの海には、菊の御文章をつけた我が
海軍は海の城かとお思ふほどな臣体を浮かべて我が国を守つて居る／目の前の海を見れ
ば。僕等の胸がおどる。／（終り）

――と海と軍と国を綴る。

つぎが、「飛行機 初四 中島徳吉」――

飛行機は毎月毎月飛んでいます、このあいだれんしゅうをしていた飛行機は今どこにい
つているのでしやか、ちかごろはちつともくんれんしなくなつたそのかほり毎日毎ばん
にくい敵機がやつてくる、それは飛行機がたらないのでしやか、もし日本に飛行機がた
くさんあつたら日本に敵機がくるまでにたたきおとせるでしやう僕たちは敵機のばくお
んお二三かいきいた。／それは一機だからよい。もし十機も二十機もとんできて大島を
ばくげきしたら僕たちはどうなるでしやうかうらやまににげても。／ぼうくうがう口の
中にはいつでもだめだ、どうしても大東亜戦争に勝には飛行機がなくてはなりません／
終り

――戦争と飛行機。

もうひとつ、「飛行機 初四中井八千代」――

今頃は軍艦よりも飛行機のほうがたくさんあるといて、先生がゆはれました。私達は

今から前よりも、もつともつと、お金をけんきんして、飛行機をたくさんつくつてあのにくいにくいアメリカやイギリスを上からばくだんでみんなこつぱみじんにしてやらなければなりません今頃はラジオや新聞でよくあつてあでできるだけけんきんをして一機でもおしく飛行機をつくつて、戦地に送ってあげてくださいと、いつてあます、いまから私達も前よりもお金をちよきんしてどんどん飛行機をたくさん山ほどつくつてあのにくいにくいアメリカやイギリスをたたきのばしてやらなければなりません 終

——献金と飛行機と憎い敵への爆撃。

この号には、子どもたちの絵も綴じられている。前号「あとがき」に「次には書画も一緒にいたゞくことにしました」と記されていた、そのとおりとなった。

その1枚。松のある場所は大島の療養所だろうか——「高一 大西哲司」の絵。この1枚とよく似た構図のもう1枚が、「高〔数字分不明〕島勇」の絵。もう1枚、松と水平線の太陽を描いた「初四中井八千代」の絵。そして山の絵が「初二庫元久子」。この号にはこれら4枚の「書画も一緒に」に綴じられていた。

てっちゃん 戦時下の1945年に十代の少年だった大西哲司。わたしは彼に2度会っている⁵⁾。彼はてっちゃんと言われる老人となっていた。てっちゃんたちといっしょに食事をした。彼は2009年6月に亡くなった。ちょうどそのころ、手書き手づくり『青松』の整理と撮影を始めたころで、その『青松』のなかに少年てっちゃんが描いた水彩画をみつけた。デジタル撮影した2枚の水彩画をプリントして大島のキリスト教霊交会代表に渡した。てっちゃんの三十日祭で、そのプリント水彩画が祭壇におかれたと聞いた。てっちゃんの絵がもう1枚、ここにみつかった。

このあとの号にも、てっちゃんの書画が綴じられてゆく。

後記 この号の「後記」は笠居誠一の執筆。

わが協和会の長老北山謙三氏は、青松園の短歌会創立当時から同人であり、邱山会の同

⁵⁾すでにべつに書いたところと記述が重なる(阿部安成、石居人也「後続への意志—国立療養所大島青松園での逐次刊行物のその後」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.116、2009年9月)。

人として俳句もよく作つた、如何に故人が園の為につくしたかは、総代石本氏長田大兄土谷君の文を読めば知る事が出来る、私達は古き親友を身边から亡くする寂しさは表現するに文字を知らない、然し手を空しゆして氏を送るにたえず、青松第五号を故人の追悼号として発行する、各位には玉稿を投ぜられしを感謝する、又この度は学園児童の作品を頂く事の出来しを感謝したい

——と、ここでは、追悼号でありながらも、子どもたちの書画が掲載できたと特記されている。

藻汐草休刊後青松の発行も第五号となる、私達は青年諸氏の中に文芸熱が起り投稿される事を希望する、園の向上は青年各位の熱と意気に待つ外は無い、興亡の決戦下言葉の空手形で無く、北山氏の如き愛島の実行者の出現を待つ、今回は土谷君が多忙の為に小子が編輯したが不出来をおおびする

——ここにいう『藻汐草』とは、大島の療養所における総合誌というべき逐次刊行物で、療養者からすれば園側の刊行物となるのだが、実質は療養者が編集の一端を担っていた⁶⁾。その休刊が1944年のこと。その後わずか数か月の空白期をおいただけで、この手書き手づくり『青松』の編集と発行が療養者によって始められたのだった。

その『藻汐草』の創刊が1932年のこと。このおなじ年にまた、自治組織の機関紙『報知大島』も創刊されていた。同紙の初期の号にも「愛島」の語がみえた。あらためて戦時期にもこの語が用いられ、故人への哀悼が綴られていた。

読後感 縦罫線の入った便箋に記された「読後感」がある。署名は「黄葉夕陽村舎人」、ペンの筆跡は林文雄。

◎土谷・穂波両氏の真剣な追悼の筆に教へられる事が多い。／死は人生の重大事なのである、過去なくて現在はないと土谷氏の云ふ如く故人の過去を我等の現在未来に生かす内省こそ故人の最大の追悼であらう。穂波氏の云ふ如く総代役員の心労は一方でない、

⁶⁾ 現存する『藻汐草』すべてのリプリント版を2014年に刊行した(阿部安成監修、解説『藻汐草』リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ2、近現代資料刊行会)。その別冊に収載した解説「総合する企て—『藻汐草』を解説する」を参照。

精神的慰労が出来ねば物質的に報ゆべきだと云ふ、尤な話だ、決して他山の石とはせ
ない、只さばかりの事では病を押して働いて戴いた尊い犠牲に対して余りにも足りない
であらうことを恐れる／◎「親しきはつぎつぎに逝く寂しさに君の名をまた一つそえけ
り」。「君病むと聞きつゝ遂に訪はざりし身の怠りを悔ひて祈れし」。笠居氏の歌の心をそ
のまゝ悔ゆること多し、祈るとも及ばざるを悲しむ

——笠居の短歌を転載するようすは、療養者とともに、療養者ところあわせて、故人を
悼むかのようだ。

◎北山君が生れたみちのくは歌の国、雪の国、温泉の国である、君が邱山会員として又
藻汐短歌同人として風流を解したのも故なきに非らずであらう。日記は人に見せようと
て書いたものではないだけに真実に富む、君の実に立派な日記の一節がさながら全生涯
を物語って居る様である

と、綴じられた日記の意義を記していた。

◎「幾度か思ひかへしぬ給はりしみうたふとくたゝなみだのみ。」これは昭和七年十一
月十日畏くも皇太后陛下御下賜の御歌に応へまつりて当時君の詠んだ歌である／「一億
の末の末なる我も又片居の日々を神風とせん、」とは今年正月によんだ君の遺詠であつた
／戦時病者の指針として君の精神はこの歌と共に永久に生きるであらう

——御歌への応答、また戦時の立身とでもいおうか、それらが歌となった。

順 番 裏表紙見返しに「廻順番」があつた——「浅野兄／竹原兄三好兄／綾井兄／田根
兄／長田兄／堀川兄／大高兄／3 岡本兄／今井兄 戻り」。多忙という土谷には回さなかつ
たのか、まえの第4号に照らすとだいぶ名が減っているし、追悼号ゆえか少年室と少女室
も回覧さきとなっていない。

第6号 手書き手づくり『青松』の第6号は、予告のとおり、「故上本隆重氏追悼号」と
なつた。この号名、号数、誌名、いずれも左から右への横書きで記されている。これまた
前号同様に簡素な表表紙だ。この号はまた横長の判型となつた。

表表紙見返しに貼られた原稿用紙の一部に「目次」が記されている。

「巻頭言」／石本俊市「弔辞」／長田穂波「噫上本隆重君」／故上本隆重「随想（遺稿）」
 ／井上真佐夫「上本兄の想出」／土谷勉「上本さんは生きてゐる」／初六山口忠夫「画」
 ／故上本隆重「眠られぬ夜（遺稿）」／笠居誠一「噫上本隆重君（短歌）」／小見山和夫
 「上本隆重氏を悼む（短歌）」／大原枝風「上本氏追悼俳句」／土谷勉「潮音」／高一山
 上広光「豚さがし」／高一岡崎安彦「初めての敵機の爆音」／高一西哲司「のみ」／
 笠居誠一「噫栗林中将」／初四中島徳吉「画」／喜田正秋「俳句」／藤田薫水「俳句」
 ／笠居誠一「短歌」／斉木操「短歌（父の死他）」／泉俊夫「短歌」／小見山和夫「短歌」
 ／浅野繁「短歌」／川染先生「久米良寛氏を悼む」／「後記」／土谷勉「防空座談会」

巻頭言 署名のない「巻頭言」は、まえの第5号に載った綾井譲と名のある稿の筆跡に似ている。特徴のあるはっきりとした書体の文字が、「国華 一号 10×20」の文字と罫目が印刷された四百字詰原稿用紙の半分に記されている。中央余白の記号は、第5号「潮音」が記された「大和製品」と印字された原稿用紙のそれと同一に見える。当時に一般の記号なのか。

み民吾れ大君にすべてを捧げ奉らんとは／只茶飯事の口頭禅ではなく、自ら腹の底をうつて出る真実であらねばならぬ。決戦愈々本土に迫つた今日只今、私的観念の一切を捨てて公に殉じ大君に仕へまつこそ君国の民である。何等生産の力もなければ身をもつてこたへ奉る道も吾々にはない、併しお互は与へられた生活に感謝し一物を失はず、一錠をおろそかにせざる様、心して生産の一助となし身は例へ病めると言へど療養精神を全し来たるべき日の来たらば日の丸のみ旗の下に潔く吾死なむの覚悟をもち、仇敵撃滅への精神特攻隊であらねばならぬ

——「何等生産の力もなければ身をもつてこたへ奉る道も吾々にはない」との戦時下の自己認識が、くりかえし複数の療養者によって記される。せめてなり得るところが「精神特攻隊」なのだ。「来たるべき日」とは、どういった日だとおもっていたのか。

石本 故人の死去は「昨二日十七時四十五分」のことだったと始まる「弔辞」は「総代石本俊市」による「昭和二十年三月三日」付。4ページの紙幅。

故上本隆重は「大正十年七月十一日ニ入園セラレ早クモ大正十三年十一月ニハ副総代ニ選出セラレタリ」とのひとだった。大島の療養所では、さきの北山謙三とともにたてつけに自治の重鎮を喪ったこととなる。

そのひととなり記される——「君ハ資重厚ニシテ積極進取ノ性ヲ具ヘ、企画的才能ヲ有シ、凡テノ事ニ対シ真摯ナル研究的態度ヲ以テ臨メリ」と評される故人は、「昭和六年一月ニ起リシ彼ノ大改革運動ニハソノ実行副委員長ニ挙ケラレ入りテハ委員長ヲヨク補佐シ出デテハ全病友ヲ正シク指導シテソノ帰趨ヲ謬ラシメス才氣^{〔マ〕}煥發、実ニ縦横ノ活躍ヲナシ吾カ協和会ノ創立ニ渾身ノ努力ヲ効セリ」と評されるほどの故人は、「爾来衆望ヲ担ヒテ総代ニ推戴セラルルコト二回、副総代ヲ勤メルコト七回、事業部主任ヲ一回、顧問ニ推挙セラルルコト一回、評議員ニ選出セラルルコト六回ニシテ今日ニ至ル、ソノ勤務年数ハ実ニ前後約十二年ノ長キニ及ヘリ」とその仕事ぶりがふりかえられたのだった。「本会カ今日ノ隆盛ヲ致セル、亦実ニ君ノ功績ニ負フトコロ甚大ナルモノアリ」なのである。

故人が「ソノ実行副委員長」として動いたという「昭和六年一月ニ起リシ彼ノ大改革運動」にふれておこう。たとえば、大島青松園入園者自治会が編集した、「国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史」の副題がついた史誌である『閉ざされた島の昭和史』（大島青松園入園者自治会（協和会）、1981年）巻頭の「発刊のあいさつ」（大島青松園入園者自治会（協和会）会長神崎正男執筆）は、「昭和六年三月八日、長年の、強権による弾圧に抵抗し、入所者の総意を結集して、自治会（協和会）が結成されました」と始まる。そして同書第1章「島のあけぼの」の「1 一台のラジオ（昭和六年）」において、自治会結成のきっかけとなった、ラジオ破壊という出来事によって「大島療養所の患者四一〇余名が、所当局の不誠意な扱いにたえかねて決起した」その日が1931年1月16日で、ここに始まった一連の行動がさきの引用にいう「昭和六年一月ニ起リシ彼ノ大改革運動」なのである。

「弔辞」にもどると、そこではつい数週間まえの北山の逝去も想起され、「近時巨星相継イテ墜チ、タメニ島ノ天地暗キヲ覺エ、吾等ノ寂寥ト悲哀愈々深キモノアリ」とふたりの死が惜しまれた。

上本もまた「准協和会葬ノ礼ヲ具へ」てみおくられた。

なお、石本の「弔辞」は、縦罫線のある用紙の裏に記されていた。罫紙には、「昭和十九年度総代推戴投票結果」とその冒頭に記されてある。

長田 長田穂波は「噫 上本隆重君」と題した稿を追悼号に寄せた——「上本さんも逝かれた、又一个協和会の巨星が落ちた、何となく小暗くなつた感がする。君が島の向上のために尽されし足跡は実に大なるものである！／× × ×／君は何を為すに当りても用心深く能く＝最悪の場合は＝と言はれて居たやうに思つてゐる」とその口癖が、それにみあう性格とともに想いおこされている。

故人の葬儀を「准協和会葬として礼遇なした」ことが記され、ついで協和会のことへとペンが移る——「三月八日協和会拾五回設立記念の座談会に総代及副総代たりし人が僅に拾名に過ぎなかつた。しかも皆四十才台以上の者が多く、古参の顔のみである。これでは、いかん！もすこし若い新顔も加はらねば活気が失せると想ふた」という。四十歳代の療養者も要職を占めていたとはとても若い気がするが、彼らにとってはそうではなかつたということだ。もっと若返りが必要だと長田が説くには理由があつた。

協和会の前身『患者自治会』の創立当時は元より、其の前後の総代は二十才台の人が多かつたし、彼の頃の活躍^{〔中〕}建^{〔建〕}は皆若人であつた＝あられづりな点もあつたが＝活気に溢れ、希望を抱きて前進した。／君も又若い理想に燃えて建設的に活躍せられた。

との過去があり、それが提示された。そして自分のことも——

彼の頃、自分は平会員、特に弱者の事とて＝小心に成り行きを案じ＝静かに結果を注目して祈つて居た、そこに特種の使命を覚えて『修養団』の性質を取入れたのである。と、修養団の支部結成がかんたんにたどられた⁷⁾。そして、「君も又共鳴され幹部として努力して下さつた。／× × ×／北山君と言ひ、上本君と言ひ、斯る人格者は修養団、宗教方面等々に於ても尽されし足跡や又、大なるものがある……！／癩者といへども実に立

⁷⁾ 大島の療養所における修養団の活動については、阿部安成、石居人也「無教会と愛汗—大島青松園キリスト教霊交会の2つの精神」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.121、2009年12月）を参照。

派な一生を過されし方達と言ふべきである！！」との讃え方がなされたのだった。「癩者といへども」という逆接は、療養所自身にもしっかりと内面化されていた。

歴史 先達の事績が忘れられてゆく——「時代は変り人も又変つて終ふ！！／『あの人が……其様な偉い方ですか！』／語る者なくば埋もれて行く＝悲哀とのみ言つて済まされぬ問題である！！／何とかならぬものであらふか……。／× × ×／現在の協和会は君の如き幾多の功労者の心血の犠牲の上に築かれたもので、決して一朝一夕に、又只なつたものではない＝然し後々の入院者の誰が知らふ？＝知らざる人々に感謝せよと強ゆるも無理である」と悔恨や理解を示しつつも、「協和会よ何処へ行く！」と記さざるを得ず、「功労者は次々に逝き、感謝の念はうすれゆく。故に自分は言ふ『新しき功労者の現れむ事を』活気ある若人の立たれん事を。新らしくヨリ善き時代を建設せられむ事をと！！／× × ×／希くバ第二、第三の上本君や北山君の現れむ事を＝協和会の向上への努力＝こそ若人の手向の華であらふ！！」と故人を送る場で長田は、若い療養者に檄を飛ばしたのだった。

その裏 長田の稿は、「KYOJUTO 10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙5枚の裏に記されていた。ノンブルは、31、4、28、27、26、とすべて順にはなっていない。やはり、信仰にかかわる内容のようだ。

日記 目次にあった故人の「随想（遺稿）」とは、これまた前例にならったかその日記の合綴となった。「故上本隆重氏の日記の一節」との書きこみがある。1月1日が火曜日とは、1935年のことか。

一月一日 火曜日 晴曇天／何物かに手を延して引かるゝ様な／何物かに追はるゝ様な
落附けない気持 これが正月／を前に置いた歳の暮だった／歳の勢か それとも幾十回
となく繰返した島の正月の／単調化した勢か 人並の年末悔悟とか 新年の希望と／か
抱布^マとか なくなった様だ／唯、修養団の行事としての早天遥拜式に望んだ食後五時／
その式に列して早めて^マ元日の気持がした

——修養団行事の効能というところだろうか。日付がおなじかわからないが、上本の「随

想」がつづく——

“~~癩有~~の救済設備^策を伴はざる癩予防宣伝は病友^{やその血族を}を救ふどころか反って窮地に陥れてみるのだ”／こゝ拾年前はどうであったか、癩病は送伝病として縁組等は非常に嫌うした、それに依って生れる悲劇精神的の重圧、苦悶、地位名誉があれば有るだけ外聞を思ひ、結縁の釣合を考える、それだけに貧乏人より悩みは数倍化される／それにしても人生の下積として運命付けられて、諦められぬ乍らも歳を取った父母は何時の間にか、もがいても詮ないことを意識して諦めてゐるのだ／諦められぬのが、若い癩^{者をもつ}の兄弟だ／一度は人並の望みも 青春の誇りも 持つて見た筈だ／それ等を なんて世の人が入れよう／晴やかで ある可き青春の顔に 一抹の暗影が浮く／漸く涙が湧く 墳墓の地のみならんや到る所青山ありとて故郷の土をけて後をも振り向かずして出るのだ／然し影の形に従ふと現ふ言葉のその如く 暗い影は北／極に行こうとも付き纏ふのだ／はては出郷当時の意気も希望も滅茶苦茶にふみにじられ 自棄的な人並の線以下でうめくか？警官に払はれた盗人の如に みすばらしくヒョッコリ家のしきいをまたぐのだ 留まるも出るも冷たい運命の囚と同じ運命に逆へば逆ふほど運命はギヤクに流れるのが世の常なんだ

そのつぎには日付の異なる日記の一部か、「厳肅」と題された文章となる。「十一年一月廿九日」との括弧書きがある——、

声と音によつて感ずる最大の厳肅は起立して合唱する君ヶ代である、心を一つにして君ヶ代の万歳を祈る、その声の厳肅さ、厳肅と言ふ言葉はこの時に用意された文字の様に、それほど私には=の度にひびく、歌言ふ歌声と言ふ声の中でこの声のなでかく迄心をとらへるのか、それは愛国の至情があるからなのだ／日本人にこの君ヶ代の声に感激し感動するうちは日本は断じて安泰だ、

そのつぎの題が「唯物主義と観念主義」、そして「泣くも笑ふも」。

井上 また追悼文にもどって、井上真佐夫の「上本兄の想出」。井上はみずからを、「私は入園以来十余年の長い間、上本兄と起居を共にし、又兄が特定室へ行かれてから後も深

い交際を続けてゐた一人であります」と示す。故人は「自治会（協和会の前名）誕生以来は言ふまでもなく、その以前から島のために廿余年の長きにわたつて尽された数々の功績については、既に周知の通りでありまして、今あらためて私が功勞の一つ一つを申述るまでもありません」と言葉少なに始めた弔文はつづく――

で、私は、私たちが学ばねばならない点、即ち後輩に垂範された一端を記し、以て兄の徳をたゞへ、人格を偲びたいと存じます。

と前置きして語られた故人のようすは、自治の要職を担ったゆえの「多忙」「繁忙」だけでなく――

又一方、農耕作業もその頃から始めてをられたやうに記憶してゐます。その上に、園内普通作業、或は臨時作業等々に勤勞の汗を流すなど、精神的にも肉体的にも、大変お忙しい日々であつたことは申までもありません。／さうした眼の廻るやうな日常生活の寸暇を割いて、文筆に精進されてをられた姿などもよく見かけたものです。この一事なども兄の奥床しい点であり、私たち後輩に対し好學^{がく}への熱意をそゝる拍車であり、無言の教訓でもありました。

との克己、また、

一面兄は、不自由勝ちな病友たちの面倒を親身になつて見てをられたことです。これらが兄の誠に偉大なる風格と人情味を物語る陰徳として特筆しなければならない点だと思ひます。

と故人を讃え、その「御冥福を心静かに御祈りいたす次第であります」と稿が閉じられた。

井上の稿は、「十行 廿字詰」「西香 49 規格 A4」の文字と罫目が印刷された原稿用紙に記されていた。

社会 ①から⑫までのノンブルがふられた無地の藁半紙に、土谷勉は「上本さんは生きてゐる」と題した文章を記した（4月1日付）。土谷はまず、社会とひとを説く――

人は本能的に集團生活をし、それが社会であり、政治的、経済的、文化的にあらゆる意味に於ける交互關係を生ずる。従つて、人といふ場合、社会から離れて考へる訳にゆか

ない。人は生活することによつて社会的になるのであつて、生活をしない抽象的人を考へることは不可能である。人といへば社会である。社会といへば人である。生活こそ紐帯であつて、両者はあくまで同時的關係にある。

——ここまで読んだところで、療養所内で「社会」の語に籠められていた意味をあらためて想起して、ここでの用法とくらべてみよう。

たとえば、前掲『閉ざされた島の昭和史』の「習俗と園内特殊語」と題された節に、「そうけん・しゃかい」の語があがっている。後者の「しゃかい」は、島の外の意で、刑務所での「娑婆」と同義語である。隔離が終生の運命と諦らめきっていた昔は、再び住めぬ世界を追慕憧憬して、「社会にいた頃は」とか「社会は祭ごろだが」といった具合に、絶えず使った言葉である。文章などには「実社会」とも書いたが、「島内も一つの社会だ、我々も共通の人間だ」と自覚してきた頃から、いつとはなしにそうした言い方はしなくなったとのこと。ただし史誌は「自覚してきた頃」がいつころなのか明示してはいない。

土谷の「社会」の語の用い方は、社会一般なのではないか。そこに療養所もふくめていのではないだろうか。用法の違いがあるとして、それはなにによるのだろうか。

土谷の稿は、「人一人の死亡は当該社会から何らかの意味でマイナスを意味するが、ある場合、社会が個人の数的総和以上のものであるといふことは、時により人により、それが過大であつたり過少であつたりするのを意味する具体的一例である」と、話題の焦点を故人に絞ってゆく。

上本さんを亡くした場合、人一人減つたと言ふやうに数的に簡単には済まされない偉大な損失であつた。部隊とか或は兵団にとつて兵の一人々々は言ふまでもなく戦力の基礎である。それと同様、吾々の場合に於ける病友の一人々々は、兵団に於ける兵の一人々々の如く何時の場合にも誰も同様に大切であるが、上本さんの場合は、特に大切であり、かけがへのない大きな損失であつたことを痛感する。

と、療養所という社会もまた、ひとなのだ土谷は唱えるのだった。

土谷 さて、土谷は故人を、「衆に先んじて島畑にトマトを最初植えたのは人も知る故

人であつた。苦心して手の届く限りの参考書をよせたと私は直接故人から聞いてゐる」と明かした。土谷は「一塊のトマトに故人の息吹を感じるのは、豈私一人でもあるまい」とのべる。さらに土谷は「死生観」を論じ始め、「よし肉体は亡びようと、楠公〔の大精神〕が現在立派に生きてゐるのと同様、故人の功績が云々されることは、誰の場合でもその人の精神が生き遺つてゐて後進の指針となり鞭撻となり、心魂の拠り所となつて生きるのを暗示する」と論をくりひろげた。

ひとの死をもつてつい、「空白」だの「損失」だのとそれを惜しむ言葉が用いられるが、なにより「故人の業績を詳さに検討することによつて故人の精神を吾々が日常に生かすか否かにかゝるのである。／畢竟ずるに上本さんは亡くならうとも、故人を偲んで忘れず、故人の頭脳を精神を思考力を吾々のものとして常に生かし得るならば、損失が何等損失でなく、空白が空白でなく、却つて心ゆたかな、あやまたない、生きの道がつゞけられるのではなからうか」と、故人の死と生をとおしてこれからの指針を示したといえよう。

下線部の原文には、赤インクで傍線が引いてある。

画 目次にある「画」は、「初六 山口忠夫」による軍艦の水彩画。色鮮やかで構図もしっかりしている。

日記 そのつぎにまた、「故上本隆重氏の日記の続き」が入る。「夕方に今井きみさんに会ふた／小品文 眠むられぬ夜」の題がついている。

追悼歌 つづいて追悼の短歌となる。まず、笠居誠一「噫上本隆重君」――

今にして思へは悲し健けき日の大方は島につくせる／最悪の場合を常に想ひ居し君の慧智も遂に術なし／島の為時に想ひを異にして小夜更るまで語りしものを
これらの歌は、「大島青松園」の名が印刷された罫紙の裏に記されている。この事務用箋は配給票だろうか。

つぎが、小見山和夫「上本隆重氏をいたむ」――

みいくさのまさ中に病みて逝きにけるふかき嘆きの私ならず／健けき人に知らえぬ功積みて島に終りしその一世はも／在り経つゝかそけきものを島に病む一つの命春に背きつ

つづいて、大原枝風「上本氏追悼句」——

畑主の変りし畦に蓬摘む／蓬野や畑なほ旧き主名呼び／立を指す柩を押しゆく春の泥／
野辺葬る人犇めきぬ春の泥／葬柩に礼を尽して耕しぬ／御悔みを申す遺族に春寒し

潮音 「目次」では「潮音」となっているそのまえに、(勉)の署名がついた稿がある——

総じて詩作には或る主題を確把し、それを直感的な表現にのぼすことが肝要である。その間、また一応は人がよんで明快に解るやうに、或る程度の説明的辞句を用ひることをも否むわけにはゆかないものである。でない、と、とかく独り合点、独りよがりになるきらひがある。こゝが詩のむつかしいところである。／征旗二月号／大木惇夫

——詩作にあたっての気に入った戒めを転載したというところか⁸⁾。

つぎの、土谷勉「潮音」は日誌の体裁をとっている——

◎三月二十日——。／常務員と作業員——つまり働く者二百六十一名に対し、白菜一人宛三百匁特配した。日本広しといへ、働く者、働かざる者、食料の差のない処はさう多くあるまい。青松園などその最なるものである。よし役所から支給される食料には差別はつけられぬとしても、園内生産物（働いて作った品物）なら、そこに幾分の手心を加へたとて文句はあるまい。これが今期詰所の方針であつた。過去屢次にわたる特配はこの方針に則るのであつて、三月二十日の白菜とても同様である。／◎三月二十四日——。／園長先生の査閲の下に聯合奉仕団の訓練が勇ましく挙行された。焼夷弾投下に対する防火訓練はこゝとして最初であるとはいへ上出来であり、園員各位の時局認識のほどまさこそと頷かれ、ほんとに頼母しい限りであつた。園長先生の御懇切な講評のいたゞけたことも嬉しかつた。／◎引つづいて園長先生は横穴式防空壕の位置選定について総代以下係を従へさせられ、山ぎは病棟間を巡視された。／◎時局急迫下、防空頭巾を百、常務員、奉仕団常備員のため製作方手配した。材料は芝居の新派衣粧をつぶすことに諒解を得たのであつて、製作一切は婦人団の奉仕によることになつた。／◎ウドンの代用

⁸⁾ NDL-OPAC で検索したところ国立国会図書館に『征旗』（東京、日本報道社）という逐次刊行物がある（第1巻第1号、1944年8月～第2巻第1号、1945年1月、第1巻第2号欠。2016年4月29日検索。未見）。

食が二十七日あつた。「こんどの代用食は何日だらう」と、指折つてたのしむなどとは妙である。そのかげにひそむ当局の温い親心を味合ひたい。実際量目の点、勿体ない。／当日は葱も一人宛一束、特に殖産部の尽力で配給することによつて景を添へた。一束を笑ふ勿れ。一匁目の葱が十束の園内であるから一束といへども汁に入れるに充分である。葱汁で代用食のウドンが鱈腹たべられる処は他所にはなからう。感謝は何処にでもある。足元にあるものである。感謝に應へて奮励すること——。それが即ち御奉公であり、明日の醜夷を撃擧する大切な戦力であるのだ。／◎作業は吾々の療養生活にとつて欠ぐべからざるものである。相愛互助の吾が療養精神は、作業することによつて具体的に実践されるのである。よし病むとはいへ働ける者が分に應じて働くことは当然であつて作業の精神は奉仕である。／今回最初の試みとして作業一ヶ年勤続者のうちから／男十名／女五名／の表彰を見た。まことにうれしいことである。／特に現在、女性の作業負担は大であつて〔中略〕一ヶ年二十四回のうちこれだけ人の嫌がる看護をして下さつた一事を思へば、誰しも感謝せずにをられまい。尚、これと同時に一ヶ年間無事故の部屋が表彰された。〔ここに「16室 32%」の後筆追記〕／二号、六号、九号／十一号、十五号、十六号／十七号、十九号、二十四号／二十五号／二十七号、三十二号、四十一号／四十二号、五十二号、五十三号／部屋は協和会の単位である。部屋さへおさまれば、島に風波はない。室長さんには実際お気の毒であるが、各部屋々々があくまで正しく美しくありたいものである。／◎防空態勢強化策について今いろいろ考究中である。奉仕団とも協議の上、やがて安心していただける具体案が出来るだらう。防空即生活、生活即防空である。防空を忘れては一日たりとも成立たぬ。確固たる無敵の構へを急ぎたいものである。

——差のない食料配給、横穴式防空壕（これはおそらくは現大島会館北側の斜面にある穴か）、新派衣裳をつぶしてつくる防空頭巾、女性におおいかぶさる作業負担、についての記録となる。ここに記された聯合奉仕団については、その団報がいくつか大島に残っていて、

創刊号は1942年1月10日の発行だった⁹⁾。

ここでも、下線部の原文には赤インクで傍線が引いてある。

子ども 追悼号となった本号にも子どもの作品が綴じられている。高一山上広光「豚さがし」、高一岡崎安彦「初めての敵機の爆音」、高一大西哲司「のみ」。

岡崎は、「あつ空襲だ 情報は室戸崎を北に進んでいるといひました、すると大島の上を飛ぶ事がわかりました。大島の上を飛ぶといふので恐ろしいようなおもしろいようなへんな気持ちがしました」、やがて、「なんだか爆音がきこへてくるような気がした耳をすますとやっぱり爆音たラジオで聞いた B29 の爆音そつくりだなんだがそこひびきのある音で悪魔のうなり声のように聞こえた」と率直に記した。

僕は外へ出て見たよその人も雨戸をあけてあそこだあそこだといつたが僕にわ見へながつたざんねんだつたがしかたがない室へはいつてわいわい騒いでいると情報は高松ふきを東北にむかっているといひましたはじめて B29 の爆音を聞きなんだか経験をへたような気がしました 以上

と綴った。

「のみ」——「つかまへようと思つても、なかなか小さい、くせに、すばしこくて、つかまへる事が出来ない、しかし、たまに大きいのを、つかまへて、／パチツと言はすと胸が、すつ、とする。／〔中略〕ほんとうに、のみは、大島名物と言つても、よい、くらい、たくさんある。僕はのみは、大きらいだ」とは大西の文章。

お便り ④の署名がある文章が小さな紙片に記され、それが原稿用紙に貼られて綴じられている——

◎青森の内田先生に浅野君の歌集「星霜」と共にお便りを差上げました処、御返書にそへ左の短歌をいたゞきました。／先生は近頃たいへん御元気を恢復された様子、何よと思ひます。

⁹⁾ 阿部安成「かくれんぼの書史—国立療養所大島青松園協和会（自治会）所蔵史料『報知大島』所報』全癩患協ニュース』の紹介」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.159、2011年11月）を参照。

その内田の稿は、「十行 廿字詰」「A4判」との文字と罫目が印刷されている原稿用紙に記されている。1行めに「消息に代へて」、2行めに「内田守人」、3行めから短歌——

長病の床ゆ起ちつつ自らに待避し得るはかたじけなしも／非常袋は吾が背負ひつつ待避
せむ気構持ちて安けし今は／焼夷弾の区別を書きし新聞は妻にも教え切り抜き置くも／
雪に埋れし防空壕はのぞきつつ帝都の空襲を思ひ見むとす／六十年振の大雪と云ふこの
年は井戸の屋根さへ埋めつくしぬ／屋根の雪落ち窓を埋めつつ昼も小暗くこもらふ吾は
／一時間をかかりて妻が掘りくれし吾が窓久に開かれにけり／出で征くの通知すらだに
許されぬ決戦のきびしさ思ひ悩むべし／態々して陛下の兵ぞつらつらに吾子とな思ひそ
いづち仰くとも

——ここにいう内田は、医官として療養所に勤務し、「医学研修のかたわら文芸とくに短歌指導を行う」と記される人物だった¹⁰⁾。内田は、さきにふれた大島の総合誌というべき『藻汐草』に寄稿したこともあり、大島の人びととのつながりをもっていたようなのだが、その詳細はわかっていない。

硫黄島 謄写版刷り原稿用紙に記された笠居誠一の稿には、「噫栗林中将」との題がある。上本追悼という特集号の趣旨とははずれたか。稿の冒頭に3首おかれる。これらは「硫黄島守備の栗林中将が最後の総攻撃にうつる。寸前の御心を三十一文字に表現した。尽忠の御歌である」とのこと。笠居の稿はその末尾に「三月二十七日夜記」と記されている。硫黄島の日本軍守備隊の全滅は3月17日のことという（あとでみるとおり笠居はこの日付を知っていた）。療養所でも戦闘状況を迅速に知ることができたようだ。笠居は特集号に故人を悼む短歌を寄せ、くわえて硫黄島の栗林中将が詠んだ「和歌を二度三度と読み返しつゝあふれ出る涙を幾度ぬぐひしか」との思いからこの稿を記したのだった。

稿に転載された中将の第1首——「国の為重きつとめを果し得で矢弾つき果て散るぞ口惜し」には、「誠に將軍の御心を想ひめぐる時に何とおわびをしたらよいか知らない。否お

¹⁰⁾ 内田守人『日の本の癩者に生れて一白描の歌人明石海人』（第二書房、1956年）の奥付にある記述。内田については、馬場純二「医官、内田守人と文芸活動」（『歴史評論』第656号、2004年12月）がある。

わび位ではすまない。私の如き無為徒食の者が居る為に国家の戦力は減退し、前線の将兵に弾丸食糧を送る事が出来ない。かく思ふ時に不忠者の罪万死にあたひする。然し私には自殺するだけの勇気が無い。又キリストの教を信じる者にとりて自殺は最大の罪悪である。私は毎夕山上の教会堂にて国家の弥栄と玉隊の安穩。皇軍の武運長久と英霊の冥福を祈る事に使命を感じて生きる希望を持つ者である」と、笠居は記した。

第2首、「仇討たで野辺には朽ちじわれは又七度生れて矛を執らむぞ」には――

第二首には建武中興の宗、大楠公の精神を現実に見聞する。七度生れて矛を執らむぞ。将軍は我につゞけとは言はない。七度生れて矛を執らむぞ。将軍を始め将兵の英霊は七度生れて。敵米鬼を撃つ事であろう。

第3首、「醜草の島にはびこるその時の皇国の行手一途に思ふ」には――

硫黄島は不毛の一孤島に過ぎない。然し帝都を去る一千二百キロと言ふよりも、肇国の昔より夷敵に汚されし事の無い。我国土を敵に渡す口惜しさ。又此の島に基地を築けばマリアナよりのB29と戦爆聯合しての来襲は度々ある事であろう。皇国の行手一途に思ふ将軍は死にも死ねぬ思ひであつた事であろうと思ふ。

硫黄島での出来事と中将の歌につきうごかされて笠居は――

私達は今悔ひ快めて祖国^マの為に祈らずして何時の日^マに祈るか、今週は神は御子キリストを世に降し給ふて全人数の罪の赦しの為に。十字架におかかりになつた受難の週間である。然し十字架の向ふに復活がある、復活の光明を信じて祈る者には、如何なる時にも希望がある、此の原稿を書いて居る時に南西諸島の一角に米鬼の上陸が大本営発表によりて知り。又B29は百数十機の編隊にて北九洲に来襲した。祖国は将に重大なる岐路にある。然し神は正義に味方したまふ。今の苦難は勝利への道である。十字架の向ふに復活がある如く。如何なる時にも希望を持つて祈りに祈る、これが私の生活であり使命である。

と記した。「無為徒食」との自覚がここでもくりかえされている。

最後に笠居の短歌6首が記されている――

いやはての電信うちし十あまり七日の夜の戦さを想ふ／英魂は七度生れて醜草の茂る硫黄の島に戦ふ／益良男は不動明王の化身かも炎となりて仇をたをせる／出血を敵に与へつゝみ戦は衆寡敵せず遂に術なき／白刃に返り血あびて荒修羅王と荒るゝ猛雄は神の化身か／いやはての弾うちつくし敵陣に切込む兵を想ひ描けり

潮音 「土谷」の印影の印が押された「潮音」には、「◎日本一の刑法」と題がつく。

いまゝで悪いことをして居る部屋のなくなつたものは、静養室の格子のうちで息だけしてゐたが、こんど毎日炊事をしながら五日間宛で各部屋を廻ることになつた。疵のある人間を一ヶ所に集めておくといろいろ弊害を生みやすいのである。荷物をかついで行つた部屋の炊事をしながら、しかも配給物は前通りもらへずぐるぐる歩くのだからよいかげんなものである／毎日の食事異動が面倒だから一部屋五日間である。誰が一番にやるかしら。諸をとつたり、他人のみそをなめたり、その他いろいろといまはしい行為のあとを絶つて六百病友一様に明朗敢闘したいものである。戦時下の犯罪は各国とも厳罰主義が通例だが、協和会のこの方法はおそらく類をみまひと思ふ。ぐるつと部屋を一巡してそれから協議の上クジ引で部屋がきまる。一巡するのに男の普通室の者なら百〇五日かゝるさうだ。しかも病気したら、部屋の者に責任なしだからいよいよもつてやり切れぬ。天下一等の無宿者。天下一の刑法ではあるまいか、

——規則違反などの罰則として監禁拘束するのではなく、各部屋を一定期間ごとにまわつてゆくという。だれの考案か。どちらが厳しいか、どちらが「やり切れぬ」か。

画 「目次」にいう初四中島徳吉の「画」が、色鉛筆で戦闘機を描いた1葉か。その裏面には2枚の貼り紙があり、そのわきに、「初四 中島徳吉」の署名があつた。戦闘機……がたしかに描かれていながら、この絵は不思議だ。なにかそれ以外のよくわからないものが画面に描かれている。

その裏 中島少年の作品の裏には、喜田正秋と藤田薫水の「俳句」がある。前者は原稿用紙に、後者は無地の白紙に記されている。前者は、「梟や待避の準備あますなく／故郷の荷札つきをり炭俵／凍雲をもるる日射しや手術台／外科室の小さき窓の冬日かな／勝運を

しかと握りぬ鶏合」、後者は、「枕頭の瓶に映りぬ春灯／黙々と憂きの手さする春灯火／忌籠りはゆくりなきかな春灯／忘れよと思へど淋し春灯」。

笠居 「大島青松園」の名があり、昭和20年2月27日と同年3月2日か、その日付が入ったこれまた配給票のような罫紙の裏に、笠居誠一の「短歌」5首と6首――

投弾のありし気配や玻璃戸ゆり夜空を高く敵機進入す／B29の爆音近う聞く夜空曇りて
春の雨静かなる／国体の尊厳に触るる夷らは根こそぎ撃たむ八つ裂にせむ／大出血せし
めて硫黄の島真守る猛雄の武運朝祈れり／不可能を可能となして益良男は大出血を敵に
与へつ

手榴弾手になき我等歯を持ちて米鬼の咽喉かみて倒さむ／警報下の真闇になれて見る海
ゆ櫓音きしませ漁舟帰り来る／春愁のしたわく夜は風邪に伏す師の癒ゆる日を切に祈れ
り 林文雄先生へ／食ふ事に話落ち行く聞きあつゝ己を省みる潔よけれと／人は未だ寒
きをかこつ此の朝^{あした}地殻を割りて物の芽は萌ゆ／よせによせて帰る事なき仇波に岬の巖き
つぜんとあり

――根こそぎ、八つ裂き、出血といった語に着目すると、笠居は前号に寄せた短歌でも、「鉄量におごる醜敵根こそぎ撃つ日本刀の切味を見よ」「断種して日本人をたやすとふ非道の米鬼八つ裂にせむ」と詠み、ついさきの栗林中将に触発されて詠んだ歌でも「出血を敵に与へつゝみ戦は衆寡敵せず遂に術なき」とその語を用いていた。苛烈な歌だ。

さきに記された「無為徒食」にくわえて「手榴弾」をも持ち得ないとなると、いまみずからに備わる「歯」で「米鬼の咽喉かみて倒さむ」とは凄まじい敵愾心だ。「警報下の真闇になれて見る海ゆ櫓音きしませ漁舟帰り来る」からは漆黒の瀬戸内海がみえるようだ。萌えいずる芽を「地殻を割り」と詠う笠居の神経は鋭く尖っているかと感じさせる。

斉木 原稿用紙に筆で記された斉木操「短歌」は、「父の死 其ノ一」と題されている――「○やよひとも思へぬ海波たけき日や父の訃便り届けられたり／✓ゆくりなく訃にあへりけりみまかりてすでに二七忌の父のみなりし／健かに年迎へしと父の文吾が受けし折すでに亡きかや (19年末筆に年賀状で、その直後急逝す)」(引用者による下線部は後筆)。

齊木はまえの第3号と第4号に、おそらく後年にこれら『青松』を閲覧したうえでの感想などを、赤インクで追記していた。この号に見える赤インクも後年の齊木自身によるものなのだろう。

○嘆きつかれ憶ひつかれて夜は明かし昼をうとうと呆けてゐにけり／○はるばると逢ひ
に來ませるちちのみに湯茶もさし得ぬ子にてありけり（面会）／健やけくみませるのみに
依りみつうら安くみし自づからを悔ゆ

ふとすれや涙ぐむめり亡き父に通ふ想ひの稚かき頃日や／現つつには逢ふこともなき父
と知らばせめてと思ふ繰り言多し／かかることふと想ふありて怖れゐしが遂に來にけり
深き嘆かひ／既にして定めのことと己みに云ひて念ひみしものつかぬまよひや／昨秋
面会ニ來給ふ／死にたまふ父と思へば一日だに肩こなと揉みて安みししものを／死に近
き父と知れば泊め置きてせめてひとひのむのみししものを

○男の子みな捧ぐるまでを生き抜くと勢きほひ云ゐにしがひびきなかりし／○想ほへばうら淋
しさの秘そみゐてあらそひがたきよば齡ひなりにし／身を賭して戦ふ子らがうら恃み生かま
ほし軀を父や逝きたり

まだ稚わかき少年兵の=の力落ちしを想ふせちなく／9今更に父を失ひとまどへり三十路と
云ふも定念さだめなきかや／○癒えぬ身を旅に病みゐてちちのみの父を逝かしし堪へぬ嘆かひ
——「現つつには逢ふこともなき父と知らばせめてと思ふ繰り言多し」の1首のわきにみ
える「なれや夢にも」も赤インクで記された後年の追記だろう。第3号では齊木の赤イン
クの追記は、「〈後註〉49年5月再読の自解」とみせていた。この第6号もそのころに閲覧
したのでろうか。短歌を記してからおよそ4年後の再読時にもなお、父の死の悔恨が強か
ったのか。

その裏 齊木のこれらの短歌は柁目と「No.」の文字が印刷された原稿用紙に記されてい
た。その裏の無地の面にもしっかりと手書きの文字があり、ノンブルもうたれていた。本
体を壊さないよう、19、20のノンブルがある面のみをみよう。齊木の稿では「No.2」と在
ったその裏となる。まずノンブル19の面——

い勿論作者は側近者であるから、此処をねらったのかも知れないが、此の歌では其の境地までは出て居ない様である。／船笛の鳴り次ぎ止まぬ朝霧の深きがまさに雨となりたり／泉登志郎／赤澤正美／良く纏つてゐると思ひますが、二句の、「鳴り次ぎ止まぬ」は少し言ひ過の感が有る。「止まぬ」と迄は言はなくてもいいのではないのでしょうか。

——これは泉の短歌を赤澤が評した文章なのだろうか。文字は綾井讓の署名があるそれに似ている。

ノンブル 20——

岩影に青む岩蓐を踏む跣足の白きが濡れて風に吹かる。／斎藤冷泉／浅野繁／常に作者の持つ、ゆたかな抒情が観点の慥さと相交つてほのぼのとした詠嘆が感じられる。是も作者のめぐまれた自然の素質を語るものであらう。この一首から受ける調べは感慨の深いものがある。しかし再読してみると案外、感傷に流れた跡が目につく、作者は、その対象から受けた感傷に溺れてゐるのではあるまいか。これは最初に言つたことと相反した言葉かもしれないが、一句目の「岩影に」として

——これまた斎藤の短歌を浅野が評し、それを綾井が清書したか。赤澤も浅野もそれぞれに厳しい評だ。

襲撃 泉俊夫「短歌詠草」は、「OS 原稿用紙」「10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙に記されていた——「あがりなば撃砕くべき^{そなへ}備ありと首相断乎と宣し給へり／敵襲の間断もなき明暮や国内^{くぬち}ほのぼの春となりつつ／朝作業はげむ清しさほのほのと春めき初めし光りのなかに」と、春と襲撃と長のつとめを詠う。

小見山和夫「神潮特攻隊を讃ふ」5首——「南のま潮くぐりて再びは還らぬいのち示し給ひつ／一瞬のいのちを期して練りたまふ年月なりしか神ま澄みつつ／神々やま潮くぐりて現身のとどかぬいのち遂げたまひたり／空征くとま潮くぐるとますらをや必死必中の体当りのみ／敵艦と^{もろ}諸に爆ぜつつそのいのち見せしめまさずさ青のうしほに」——これらが詠う「いのち」とは？。小見山はもう1ページで「硫黄島の神兵を偲ぶ」7首も——「硫黄島を敵にゆだねしきびしさの後來るものを期してぞ待たむ／敵中に死にせむ覚悟数行の電文

にたくし後絶へにけり／神と化し皇土を護らむ忠烈の後継ぐ誓ひ一億にこそ／おごそかなるこの現実^にに真向ひてふつふつたぎる滅敵の血は／神代より皇み民のさきはひは七度生れて国にじゅんじつ／土ふかく地雷抱きて水と澄む幾刻なりし敵襲待つと／天つ日に匂ふ桜のいろ染めて永久に記さむ日光隊の名」——くりかえされた「後」の語はなにをあらわすか？、殉国の士に療養者たちはなれるか？、「滅敵の血」をたぎらさざるを得ない、この「おごそかなる現実」とは？。

浅野繁「太刀を磨ぐ嬢子^{をとめ}に与ふる歌并短歌」は、「新聞紙上にて出雲乙女の太刀を磨ぐ職場敢闘の写真に感激新なるものありて愚作をなす」との「附記」がある長歌と反歌。

書簡 「目次」にいう川染先生の「久米良寛氏を悼む」は書簡だった。園長、庶務課長、庶務係長の押印欄がスタンプで押されている。これは縦罫のある園の事務用箋か。園長（野島）と庶務係長（末澤）の押印がある。差出人は川染義信、宛て名は末澤事務官。園を離れた川染がかつての同僚の逝去を知って園に便りを寄せたのだった。細かな文字が3枚の用箋にびっしりと記されている。「紙節約のために細い字で書いて失礼させていただきます」との断り書きがある。1行の幅にほぼ3行ずつの細かな文字で故人の思い出が綴られている。それを「園長へと、亦協和会の方へと思ひつゝやはり事ム官に御願ひして可然旨通知などして頂けば幸と存します」と、「久米君のために／酷熱の国に鴻毛の墓立てり（陽哉）」の1句が添えて届けられた。

後記 署名が「(綾井)」とあり、やはり角ばったはっきりとした文字が記されている「後記」がある——「青松第六号は島の先輩であり協和会の功労者たる故上本隆重氏の追悼号にした」と始まる文章で、「松」をその同字となる旁がハと口の組みあわせの文字としている。表表紙の誌名もまたその同字だったので、「後記」も表表紙の誌名題字も綾井が書いたとみてよい。

同号〔追悼号〕のために総代石本氏より副総代今井氏よりは多忙な中を御無理をお願い致し一稿を戴いた。私が言ふまでもなく上本さんが亡くなられた事は何と言つても島の大きな損失である。／吾々の生活向上発展のためにあるひは血族開放に、宗教に精神修

養にと努めて来られた、氏の真摯な態度には学ぶべき多くのものがある。遺族の方から遺稿を戴いてその一部を挿入した、御未読を希ふ

と記す綾井は、「最近手の手術を受けて非常にペンが持ちにくくなり意に任せない」という。不自由があるがゆえに、かえってわかりやすい文字を書こうと努めたということか。

末尾に大島のように綴られ、ひとの死をかえりみる――

此の四、五日の陽気で急に御下賜楓の芽がふくらみ日向はほぐれようとする気配を見せた。／つゝじも中頃になれば盛りと言ふところで何と言つても吾々の生活には暖いのが一番いゝ、散る桜残るさくらも散る桜見事に咲き、美しく散らむため桜は花を急いでみる。人の善悪は死によつて決められる、兎も角清らかに悔を残さざる様、生涯を終り度いものと念願して熄まざると共に故人の御冥福を祈りこの稿を了る（綾井）

1 ページ 2 段組みとなる「後記」2 ページめの下段には、「◎防空座談会の記事を最後に綴りました。御諒解を得たいと思ひます。／洗濯場の裏の壕は七日、奉仕団の手によりすでに着手しました」とは土谷勉のペンか。

青山荘主人 そのつぎに記された「青山荘主人」の署名は、そのまえではなく、そのあとの文章の筆者をあらわしているのだろう。ペンの手は林文雄に見える。

◎上本兄追悼号真に意義深く拝見した。藻汐草の時よりもこの溢れるような追憶の親しみを盛った青松を捧げられた故人ハ幸である。青松は遅しく育って来た。真に喜ばしい事である。灯の油をたやすべからず／◎井上真佐夫豈と云ふ新人が登場した。文章と云ひ美しい筆と云ひかゝる隠れたる雄が居る大島だと驚く、特に君の追悼文中上本兄の遍路に対する温い指導、渡満したイカサマシの挿話は本当に美しいと感心した。つゝじの花は山においても室にさしても美しい。

引用者による下線部は、原文では赤インクの傍線。

「後記」3 ページめ――

◎浅野兄の歌たゞたゞ敬服する。最近白秋のものをよみ、今又兄の歌を見、師と弟子と云ふものを新しく考へる。兄の歌は青松に気品を与へ引上げる。／芥木兄の亡父上を憶

ふ歌、惻々として胸を打つ。何よりも感動が土台であろうと教へられる。それにしても君は豊かな天分を与へられて居る／育成につとめよ。／◎笠居兄の一文、固き題材なれどいちいち肯かれる。兄の真摯な魂によって書かれて居るからである。青山荘を思ふ祈り感動の外なし。／◎短歌、俳句については相当な方が揃って居るのであるから青松の中で批評を書き合ったら良いと思ふ。既にやって居られるかとも思ふが。／◎少年の^{絵もよい}作文甚だ面白くなった。三つとも良い。豚ものみもうれしい。誤字も少い。大に勉強すべし。／◎座談会記事もよい。どんなに読者を啓発するか解らぬ。傷痍軍人山本補導部員と戦場、傷痍軍人療養所に関する対談記など実現すれば面白いだらふなど====考へる。／◎川染先生の久米氏を憶ふ一文尊し。先日病床で敬愛園のアルバムを見てみると開園当時保育所開所式の写真に久米氏がチヤンと坐って居られた。生前星塚の血をふまれたかと嬉しかった。／◎風邪は癒ったが少しお腹を悪くし病床でねてみて書いた。乱筆恕されよ。もう大体元気になりました。御祈り有難ふ。／青松よ、益々伸びよ、雨の中を／嵐の中を／！！！！

この面は「学芸部原稿」の名が印刷された原稿用紙に記されていた。またここには、(勉)の署名がある文章が記された原稿用紙の一部が貼りつけられている——その1行め「綾井兄の美しい表紙御苦勞様、仲々よい」、これはさきの林(青山荘主人)のペンだろう。土谷が——

防空問題は時局下、いよいよ以て急である。防空即生活である。防空のないところ吾々の生活はない。／今回、吾々は園長先生の意を体し、その具体的実践につき聯合奉仕団と協議会を開催した。もちろん、防空が吾々のみの問題であつてはならない。戦ふ皇国民全部の重大関心であつて、六〇〇病友また各々が光榮ある皇国護持の防空戦士でなければならぬ。／大君に捧ぐ生命なら鴻毛より軽しとするも、敵の盲弾に失ふことがあつては正に犬死である。よし病むとは謂へ、吾々の生命はそんな安価なものではない筈だ。というとき、さきの「潮音」でも記していたとおり、「防空即生活、生活即防空」といわざるを得ない切迫した時局のもとでようやく、「防空戦士」となろうとする「吾々の生命」は、

「よし病むとは謂へ」、「そんな安価なものではないはずだ」とうたえられたのだった。

療養者にとっての戦時がここに動きだしたと、わたしは考える。

防空座談会 そのつぎからが「防空問題」についての座談会記録となる。「防空座談会」の開催は4月6日、場所は「会議室」、「参会者」は「総代 石本俊市／副総代 今井比沙志／庶務部主任 三木康平／会計部〃 岡本雅之助／作業部〃 篠原信市／殖産部〃 佐藤佐吉／購買部〃 太田垣益市／病室部〃 清水政雄／聯合奉仕団長 長野太郎／警防団長 枡方照二／副団長 金村砂夫／青年副団長 高木誠市／婦人団長 河田妙子／副団長 藤原正女」ですべて療養者、「文責在記者」のところには「土谷」の印影がある。

座談会記録には見出しがつけられている。まず、「◎横穴式防空壕」――

石本＝敵機頻襲に際し、防空対策強化について皆様の忌憚ない御意見を承り、非常の際まごづかない様にしたいと思ひます。／先づ、園長先生も急かれてゐるのですが、横穴式防空壕について、洗濯場の裏に一つ。十四号から北にずっと。それから三十二号室の裏と三十四号の処に掘るヨ定にしてゐるのですが、ところで防空壕を掘った経験のない者ばかりの処へ道具は不十分だし、実際こまつてゐるのです。時局下、皆様の御協力を願つて出来るだけ早く掘りたいと思つてゐます。／奉仕団の方々にはたいへん御迷惑と思ひますが、先づ第一番に洗濯場の裏のを試験的に掘つていただけませんか。／長野＝さうですね。試験的に一つとりかゝつて見ますかね。／石本＝さうしていただけると、だいたい先の見通しもつくと言ふものではないでせうか／枡方＝あすこはとても固いでせうね。／石本＝十四号以北は幾つ掘るとハツキリきまつてゐる訳でもないのですが、出来れば大きいより小さいのを沢山掘りたいと思つてゐます。二ツ穴にするか／岡本＝設計図では三間、あまり浅いと爆風の危険があるらしいのです。／今井＝二ツ穴にするとしても、三ツ穴にするとしてもその間隔は入り易い様にしなければならぬので、場所により考へねばなりませんまいね。／~~三本~~^{三本}＝それで、洗濯場の裏のはおよそ何人位入れるかしら――。／石本＝でこちらの考へとしては仕事はそちらでしていただくとしても道具の都合もあり、作業部の監督といふことにしてもらひたい。道具の先なども

一日一回は焼き直さねばなるまいし／佐藤＝実際、作業部とは切りはなせません。／三木＝この点、穴の中の仕事だから雨降りでも差支へない。／（一同笑声）／石本＝出る人数だが、八人位といふのは穴の中の仕事でもあるし、道具の関係もあってね。／佐藤＝いちどに沢山出ても仕事が出来ないのだからそんなものでせう。土曳きなども別には要るまいし。／枡方＝八人か十人といふところでせうね。／石本＝それと病者の勤労奉仕だから午前午後の二交代といふことにしたらどうでせう。婦人団の方には御苦労だが、握り飯とお茶の方をうけもつてもらひたいのです。お茶の湯は製造部の釜を使つてもらつて差支へない。／河田＝よろこんで奉仕させていただきます。／枡方＝昨今、団員の健康率が低下して常備員を送るのさへ苦心したほどでさて、どの位出てくれますかしら——。／長野＝入口二つから掘りかゝるとしてうまく奥で連絡がつくかしら。／佐藤、石本、三木＝だいたい見当がつくのではないでせうか。（笑声）／今井＝一般の入る壕だが、あくまで奉仕で願ひするより他方法がない。全団員の快諾が願へるかしら。／長野＝こんな時局だし、諒解してもらへるでせう。／三木＝何日かゝるだらう。／太田垣＝奥になつたら暗いのでカンテラなども要りはすまいか。／石本＝ではまあこれ位にして御苦労だが、早速かゝつてもらひますかね。追ひ追ひ具体的には相談するとして——防空壕を掘る場所を確認しよう。『大島療養所二十五年史』（大島療養所、1935年）に「大島療養所配置図／昭和九年十二月末現在」が掲載されている¹¹⁾。それによると、いまの大島会館の北隣に家族舎があり3から12までの番号がふられている。その北隣には洗濯場がある。当時の地図では洗濯場わきの丘のうえに天理教会がある。いまも桜公園わきの崖にいくつかの横穴があり、それがかつての防空壕跡と伝えられている。それらがここにいう横穴式防空壕の跡なのだろう。さらに家族舎は、現在の北風呂より北側にならび、13から32までの番号がふられ、その奥の左側に35と36がみえる。33と34が地図上で欠番となっている理由は不明。ともかく、いまの相愛の道がある北の山の崖下東南側にも、こ

11) 同書は藤野豊編『編集復刻版近現代日本ハンセン病問題資料集成』戦前編第4巻（不二出版、2002年）に収録されている。

のとき横穴式防空壕が掘られようとしていたとわかる。

なお、女性の発言は、「よろこんで奉仕さしていただきます」のひと言だけだった。

分哨と宿直 つぎの見出しは「◎防空分哨と宿直」——

石本＝先日の主任会議でも問題になつたのですが、警報発令毎に一同詰所に集つたらとも思ひましたがそれより分哨を適当にふやし奉仕団の方々にそこで宿直してもらつたらと思ふ。むろんごろうねで一晩交代——詰所も本部だからこの際、宿直の編成替をしてそれに応へようと思つてゐる。／詰所だけで分哨を一ヶ所うけもつてもよいのですが、何分人数も少いし、お昼の仕事があるので、差詰分哨の方は奉仕団の方に任し、詰所は宿直を三人にふやし、一人伝令に走るやうなことがあつても三人をれば先づ間に合ふのではないかしら／分哨は／北＝鶏舎の一番上の部屋／中央＝会議室／南＝香川寮／ときめたいのですが、奉仕団の本部をこの会議室にしてもらつてもよい。現在の幹部室は場所も悪いし、せまくもあるので。会議室だと、土地が高いので視野も広くなると思ふ。ラジオも何とかしてつけますが、分哨もこの三ヶ所位は設けておかぬといざといふ場合こまるでせう。／長野＝実はこちらも先日の幹部会で協議の結果、北、中、南と地域的に警戒区域を一応分けてみたのです。／太田垣＝こゝには人の住まぬ部屋がかなりあるから危険でせう。／石本＝鶏舎なら北方は一目で見えるでせう。会議室は中央が利くし、香川寮なら南によいし——で都合がよければこの会議室を奉仕団の本部にもらつたら充分だと思ふ。／枡方＝分哨の宿直は夜昼ですか。／石本＝いやお昼は皆の目があるので夜だけでよいと思ふ。実際に今のまゝではこまる。焼き出されてはあとの祭ですからね。期せずして地域的に警戒するといふことは一致しましたが、その上にその宿直してもらふといふのはどうでせう。／三木＝それで、いざといふ場合は鐘でも打ちますか。／石本＝今の詰所の鐘では大島中きこえ難い。／今井＝炊事場に現在ある鐘も動員しふつて歩く警報リンを炊事場で使つてもらつたらどうでせうね。太鼓も使へば音色できゝ分けが出来て便利ではあるまいか。／石本＝詰所の鐘はやはり時報集合の合図の関係があるのであすこに置かねばなるまいが、北の鶏舎に炊事場の鐘、中央の本部は太鼓、南

は詰所の鐘が兼ねるといふことにしてはどうでせう。／岡本＝それがよい。／石本＝危険率は病室があるので南が一番でせう。／岡本＝さうだね。／長野＝北の警戒地域は十四号以北、中央はそれから詰所まで、南はそれ以南、とでも――。／篠原＝少女室、五十三号、会堂、夜伽室はどつちにするかね。／枡方＝見通しの利く方につけたが便利だ。／石本＝四十三号の前の見通しを境界くらゐにしたらどうでせう。／三木＝それで詰所の宿直も夜間見廻りをやるのですか。／一同＝さあ――。／長野＝此方に三人宛九人の警戒員がをれば、此方だけでやれるでせう。／枡方＝九人宛とすると、五日に一回は廻る勘定になる。／石本＝詰所も三人で宿直するとちやうど五日に一回廻る訳になる。病室部があるけれど、これはその方の普通宿直だけで手いっぱいではなからうか。／清水＝どうせ責任があるのだから見廻りも病室部の方でうけ持つてもよい。／岡本＝それでは余り気の毒だね。／石本、篠原＝それでは余りえらい。／今井＝分哨の宿直を二人位に減じて負担の軽減をはかる訳にゆかないかね。／長野＝分哨二人、本部三人くらゐでやってみますか。（枡方氏と相談）／石本＝奉仕団には防空壕も掘らねばならぬし、余り負担がかゝりすぎるから詰所以南は詰所の宿直でやってみるかね。／（主任一同をふりかへる）／清水＝病室部で病室だけは引うけますから、詰所でそれ以北をやつてもらへないかしら――。／石本＝さうしますか。／三木＝分哨には各々防空壕を掘るのですか。／篠原＝病室、詰所は掩蓋を急ぐとして、鶏舎と会議室の裏は幸ひがけになるので、小さいのを掘りますかね。／石本＝非常の場合、むろん隣組は隣組で対策を講じてほしいが、一番こまるのは不自由な特定室だと思ふ。若しもの場合は園長先生も布団だけはぜひとも持つて出る様おつしやつてをられた。／枡方＝総代さん、このことについて一般にラジオ放送でもなさりますか。／石本＝ぜひさう一度したいと思ひます。／長野＝出来るだけ早く幹部会をひらいて具体的に話を進めたいものです。／三木＝それで作業部さん、鶏舎、会議室にラジオが早速つくでせうか。／篠原＝実はこちらにも電線がないのでこれだけは役所の方に依頼して至急つけていたゞくより他方法がありますまい。／三木＝実際、線が問題だね。とも角お願ひしてみませう。／石本＝宿直してもらへば腹も実際

すくので、此方としても充分なことは出来ないが、考へてゐます。

——掲載にあたって編集担当者の手が入っているのかもしれないが、誌面の議論がとても整然としている。

聯合奉仕団 つぎの題は「◎奉仕団からの依頼」——この見出しがあるページには、紙片が貼られ、そこに土谷のペンで文章が記されている。まずそれをみよう——「◎図太く敏活に＝熊谷憲一（防空総本部次長）／空襲にビクビクして余裕のない態度は禁物である。英国では空襲で五〇〇万の精神患者を出してゐるといふ。その点、わが国民の防空に対する心構へをみるとまことに頼母しい。今後、時局が切迫すればするほど落ついて図太い神経をもち、鈍重なまでに粘り強く、頑張りたい。図太く、時にあつて細心、敏活に行動するといふことが防空の三段構へである」——なにかからの転載か。防空総本部次長という熊谷とはだれか。座談会記録にもどろう。

長野＝実は詰所の方々に御諒解していただきたいことが二、三あるのです。それは他でもありませんが、非常警備班の編成について以前の規約をそのまま踏襲しかねるヶ所があるのです。以前は防空より風水害の方に多分の関心があつたらしいのです。それで、今日は防空といふ方面を重視して幾分規約にはもどるが、実際に即して編成替したらと考へてをります。規約は規約でむろん尊重するとして、この点御諒解をいただきたいのです。／石本＝戦時であるし、規約の改正といふことにはふれず、戦時措置といふことにしてやつたらよいでせう。／長野＝次は防火のことですが、現在園内に防火水槽が全部で二十あります。その上に廿一病室前のコンクリート水槽を（旧治療室の）防火水槽に使用さしていただけないでせうか。／篠原＝結構です。この際、大いに活用してもらひたいです。／長野＝火叩きはどんなでせう。十か十四はぜひ備へつけたいと思つてみますが／高木＝たいてい縄で作つて、結んだ先が一尺五寸か二尺あれば充分だと思ひます。／石本＝柄に何を使用するかゞ問題だが、何とかしませう。／長野＝水囊^{のう}ももつとほしいのですが。／石本＝今、いくつありますか。／柘方＝二十ヶ／長野＝実際はもつと必要です。それにむしろと空俵を五ツ位つづ／実は吸水管が悪いので、四斗樽も三ツ

四ツ使用さしていたゞけないかしら——。／篠原＝洗濯場のが空いてゐますから非常の際、使つてくれたらよいでせう。新しいのを備へつけるといふことも仲々ですから／長野＝コンクリート道路東は海水で間に合いますが、それ以西はバケツ給水ですより他ないので、水道の方も、至急送水していただゞけないかしら／篠原＝今は断水してゐるが、水さへあれば早速送水してもらはねばならぬ／石本＝水囊を買ひ揃へることはとても時局柄出来ないでせう。／篠原＝役所には防空バケツを備へてゐますが、非常の際には各部屋のバケツも全部動員せなければ間に合いますまい。／枡方＝各部屋でも夜は出来るだけ沢山水をとつておいてもらひたい。／石本＝洗物タンク位には各部屋とも晩には忘れず満水しておいてもらふとよい。／枡方＝さうしていただゞければ都合がよいです。／石本＝では時間もだいぶ経ちましたからこれ位で散会したらと思ひます。何分にもこんな時局です。奉仕団の方々には何彼とお世話でせうが、よろしく願ひいたします。どうも皆様有難うございました。(十五時半散会)

——この戦時下に療養所で療養者たちが組織した聯合奉仕団については、よくわかっていない。ともかくも、時局にあわせて風水害よりも空襲に備えて、規約改正ではなく編成替へでこの難局をのりこえようとする方針が提示され、それにしたがって議論されているようすが記録されている。

講評 座談会最終ページに挟まれた無地の紙に、「御願」職員の方々少しでも批評感想を書いて下さい／◎園長先生御講評」と記されている。これは林のペンか。

そのつぎに「(野島)」の署名がある文章となる——

上本君も逝った巨星相次いで墮つ感と書かれてゐるが全く同感、北山君と云ひ上本君と云ひ惜みても尚ほ余りある島の恩人である、心からなるこの青松追悼号を君の霊も喜んで享けて呉れるであらう／藻汐草創刊号と云へば十三年も前になるがこれに君は「憲三の末路」と云ふ短文を書いてゐる、その山蔭の地は私も幾度か往来したことがあるので若き日の君の苦惱もよし窺はれる様な気が〔判読不明〕井上君に依つて発表された偉大なる君の人徳語り継ぐべきゆかしい話である、前号で北山君の日記の一節を拝見した

が又本号で上本君のありし日の日記を読んで感銘一入深ひものがある、この数頁の日記は私的のものであっても一般の人々に対し無限の力を持つ尊い教化資料ともなるであらう／切に君の御冥福を祈つて止まぬ、／毎号編輯者の御苦勞、執筆者各位の御努力、青山莊主人の懇切なる評、感謝の外はない。戦ふ日本の姿そのまゝの青松が後世千金にも代へ難い尊い戦時文献となるであらうことを思ひ、此の上とも御奮励を御願ひする／桜さく島の上なる敵機かな／とも云ふべき日／（野島）

——野島園長が「戦ふ日本の姿そのまゝの青松が後世千金にも代へ難い尊い戦時文献となるであらうことを思ひ」と記したように、いくにんものひとが、この手書き手づくり『青松』が、のちに史料となることを願い、現にそうなった。

葉書 裏表紙見返しに1枚の葉書が貼ってある。宛て名は「香川県木田郡庵治村／国立大島青松園／患者御一同様」、差出人名は「ビルマ派遣森第一〇〇三六部隊／大島新之助」、これはペンネームか。ペン書きのそれらのわきに、「4/XII」と鉛筆で記されている。通信文も鉛筆書き——

拝啓、長らく御無沙汰致して居ります、皆々様には其の後御変り御座みませんか、覚えてゐる方々の名を一々 == 御挨拶加し度く思ひます、==== 乍ら病臥中、ひたすら再起を期し出征に際しお誓ひした通り、絶対に病死せず充分御奉公の上散りたきものと覚悟を新にして居ります、本日病中の徒然に大島の歌〔下線は原文傍線。以下同〕を作ってみました、皆様の御支援と御愛唱を得れば幸甚に存じます、では左記に御披露申し上げます、（曲は大衆化した親しみある歌の曲、例へば“松は緑に砂は白きと云ふあの曲でもお唄ひ下さい、それぞれお好きな曲どうぞ！（荒城の月の曲も又よろしいでせう）／大島の歌 大島新之助作詞／一、東に聳ゆる五剣山 西に浮ぶは鬼ヶ島／北に紅葉の小豆島 南に屋島の古戦場、／二、此処瀬戸海の一孤島 その名も親し大島の／上ヘラカラに集る同胞の 病癒ゆれと願ふなり、／三、春は桜に霞むら白帆 夏は涼しき浜遊び／秋は楓の御恵に 冬吹き荒ぶ風と波、／四、相愛互助も美はしく 結びは堅し病む人の／苦楽を共に分ちつゝ ひたすら励む療養に、／五、御恵深き皇宮の 弥の栄を祈りつゝ

／かはらぬ松の濃緑に 吹く松籟も神さびぬ、／六、国を思へば病む身にも 胸に燃ゆるは夜光虫／身は死し砂に化すとも 永久に守らん大島を、／始めての作詞御生気を賜り度く願ひ上げます／皆々様の御安泰を祈り上げます 敬具（昭一九、一二、／四作並記）。

——これまた出征職員からの便りか。書いたものは療養所のことをよく知っている人物なのだろうが、療養者ではないはずだ。

廻覧 本号の裏表紙に「廻覧」の順を記した紙片が貼ってある——「井上／三吉（三病）／笠居（炊事）／松田／斉木／砂広／小見山／藤田／少年室／長田／大田井／谷本／喜田／浅の、赤沢（学校）／泉、大原／戻り 土谷勉」。ここにはまた太い線で囲まれた文章がある——

廻読が余りずばら過ぎる／少くとも一人一日位で次に廻すこと、／いつもおくれる人は以後やめるから承知ありたし／土谷

——堪忍袋の緒が切れたというところか。土谷憤激。

なお、この第6号には、子どもの絵に貼付してあったような紙片があり、そこには「高二 戸田次郎」とのペン書きがあった。また、「祝辞 内閣総理大臣公爵 近衛文麿閣下」、「開会の辞 会長 侯爵 佐佐木行忠」と活版印刷された紙片もあった。

第6号の発行は、1945年4月上旬か。